



文化財保護シンボルマーク

京都府京田辺市

三山木遺跡第6次発掘調査報告書

—集合住宅建設に伴う発掘調査—

2014

京田辺市教育委員会

京都府京田辺市

三山木遺跡第6次発掘調査報告書

—集合住宅建設に伴う発掘調査—

2014

京田辺市教育委員会

巻頭図版 1



調査区全景（北東から）



跡地（西北から）

卷頭図版 2



調査区垂直写真（参考、写真右が北方向）



西区完掘状況（東から）



東区完掘状況（西から）



SX164遺物出土状況（南から）



SB601-SK150柱穴断ち割り（北東から）

序

京田辺市の南部にある三山木地区では、近鉄・JRの駅前周辺で大規模な区画整理事業が行われており、近鉄線・JR線の高架とともに水田地帯が急速に市街化され、かつての面影を一新している状況です。

今回報告する三山木遺跡は区画整理事業にともない範囲が確認された遺跡で、南山城地域でも最も古くから営まれた弥生時代の集落として知られていきましたが、このたびは奈良・平安時代の建物跡が多数みつかるという予想外の調査結果となり、京田辺市の古代史を考えるうえで興味深い事実をまた知ることとなりました。

最後になりましたが、今回の調査にあたりまして、事業関係の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導を賜りました。あらためてお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財へのご理解を賜りますようお願い申しあげます。

平成26年6月

京田辺市教育委員会

教育長 山 口 恭 一

例　　言

- 1 本書は、京都府京田辺市三山木柳ヶ町43他（三山木地区特定土地区画整理事業地内^{みやまぎ}28街区7画地）における集合住宅建設事業に伴う三山木遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査及び整理報告は、京田辺市教育委員会・睦備建設株式会社・株式会社イビソクの三者で覚書を締結して実施した。
- 3 現地調査は平成25年8月22日に開始し、同年10月31日に終了した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

調査主体…京田辺市教育委員会
調査指導機関…京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会
調査担当者…京田辺市教育委員会 教育部 社会教育・スポーツ推進課 鷹野一太郎
調査技術員…株式会社イビソク 文化財調査課 稲垣裕二
調査作業委託…株式会社イビソク 関西支店
- 5 調査を実施するにあたり、睦備建設株式会社には多大なるご協力とご支援を賜った。ここに記して感謝の意を表する。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、以下の方々からご教示を得ることができた。ここに記して感謝の意とする。（順不同・敬称略）

小森俊寛・大洞真白（八幡市教育委員会） 三好美穂（奈良市教育委員会）
井戸竜太（公益財団法人枚方市文化財研究調査会） 久保直子（島本町教育委員会）
木村理恵（奈良県立橿原考古学研究所）
- 7 遺跡及び遺構の位置は日本測地座標系により示した。標高は海拔標高（T.P.）である。
- 8 出土遺物及び図面・写真は京田辺市教育委員会で保管している。
- 9 本書の執筆は、1を鷹野が、3・4を稻垣が、2・5を鷹野・稻垣が行った。本書の編集は鷹野の指導の下、稻垣が行った。

目 次

1.はじめに	1
2.位置と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3.調査の経過	5
(1) 試掘調査	5
(2) 本調査	5
4.調査成果	8
(1) 基本層序	8
(2) 遺構・遺物	19
①1面目	19
②2面目	25
③3面目	42
④包含層	74
5.まとめ	94
(1) 弥生時代	94
(2) 飛鳥、奈良・平安、平安時代以降	94
(3) 6次調査成果から見る「山本駅」の所在	95

挿図目次

卷頭図版 1 上 調査区全景（北東から）	
下 西区建物建替え跡全景（北西から）	
卷頭図版 2 調査区垂直写真（参考、写真右が北方向）	
卷頭図版 3 上 西区完掘状況（東から）	
下 東区完掘状況（西から）	
卷頭図版 4 上 SX164遺物出土状況（南から）	
下 SB601-SK150柱穴断ち割り（北東から）	

第1図 調査地位置図	1
第2図 主要遺跡図	3
第3図 周辺地形図	4
第4図 調査前風景（西から）	5

第5図	土留め作業風景（北東から）	5
第6図	調査風景（北西から）	5
第7図	現地説明会風景	6
第8図	調査区地区割図	6
第9図	調査区位置図	7
第10図	西区（E 5区）南壁面（北から）	8
第11図	東区（C 9区）下層北壁面（南から）	8
第12図	壁面土層SP位置図	9
第13図	調査区東壁面土層図	9
第14図	調査区南壁面土層図	10
第15図	調査区中央畔土層図	11
第16図	西区下層西壁面土層図	12
第17図	西区中央畔土層（南西から）	13
第18図	西区南壁面土層（北から）	13
第19図	西区下層確認北壁面土層（南から）	14
第20図	西区下層確認西壁面土層（東から）	14
第21図	東区東壁面土層（西から）	15
第22図	東区南壁面土層（北西から）	15
第23図	東区下層確認北壁面土層（南から）	16
第24図	東区下層確認北壁面土層②（南から）	16
第25図	1面目遺構配置図（耕作溝・不明土坑）	17
第26図	西区1面目作業風景（北から）	19
第27図	東区1面目作業風景（南東から）	19
第28図	西区1面目完掘状況（南東から）	20
第29図	東区1面目完掘状況（西から）	20
第30図	耕作溝内出土遺物実測図	20
第31図	耕作溝内出土遺物	20
第32図	2・3面目遺構配置図	21
第33図	2面目遺構配置図	23
第34図	SB600出土遺物実測図	25
第35図	SB600出土遺物	25
第36図	SB600平・断面図	26
第37図	SB600-SK08土層（東から）	26
第38図	SB600-SK09土層（北から）	26
第39図	SB600完掘状況（南から）	27

第40図	SB600完掘状況（西から）	27
第41図	SB609平面図	28
第42図	SB609-SK37遺物出土図	28
第43図	SB609-SK37土層（東から）	28
第44図	SB609断面図	29
第45図	SB609-SK207遺物出土状況（北から）	29
第46図	SB609-SK207土層（北から）	29
第47図	SB609完掘状況（西から）	30
第48図	SB609完掘状況（南から）	30
第49図	SB609出土遺物実測図	31
第50図	SB609出土遺物	31
第51図	SB611出土遺物実測図	31
第52図	SB611出土遺物	31
第53図	SB611平・断面図	32
第54図	SB612平・断面図	33
第55図	SB612完掘状況（東から）	33
第56図	SB612-SK113土層（南から）	33
第57図	SB612出土遺物実測図	33
第58図	SB612出土遺物	33
第59図	SB616出土遺物実測図	34
第60図	SB616出土遺物	34
第61図	SB616平・断面図	35
第62図	SB616-SX164断面図・遺物出土図	35
第63図	SB616-SX164土層（南西から）	35
第64図	SB616-SX164遺物出土状況（東から）	35
第65図	SB617出土遺物実測図	36
第66図	SB617出土遺物	36
第67図	SB617平面図	37
第68図	SB617完掘状況（南から）	37
第69図	2面目土坑出土遺物実測図	38
第70図	2面目土坑出土遺物	38
第71図	2面目溝出土遺物実測図	38
第72図	2面目溝出土遺物	38
第73図	3面目遺構配置図	39
第74図	3面目主要部拡大図	41

第75図	SB601平・断面図	43
第76図	SB601-SK150断ち割り（北東から）	44
第77図	SB601-SK150断面図	44
第78図	SB601-SK64土層（南西から）	44
第79図	SB601-SK62土層（南東から）	44
第80図	SB601-SK98土層（南西から）	44
第81図	SB601-SK121土層（北東から）	44
第82図	SB601-SK122土層（北東から）	44
第83図	SB601-SK123土層（北東から）	44
第84図	SB601掘方半裁状況（北西から）	45
第85図	SB601完掘状況（北西から）	45
第86図	SB601出土遺物実測図	46
第87図	SB601出土遺物	47
第88図	SB602出土遺物実測図	47
第89図	SB602出土遺物	47
第90図	SB602平・断面図	48
第91図	SB602掘方半裁状況（北西から）	49
第92図	SB602完掘状況（北西から）	49
第93図	SB603出土遺物実測図	50
第94図	SB603出土遺物	50
第95図	SB603平・断面図	51
第96図	SB603-SK96土層（南西から）	51
第97図	SB603-SK143土層（南西から）	51
第98図	SB603完掘状況（南西から）	52
第99図	SB603完掘状況（北西から）	52
第100図	SB604平面図	53
第101図	SB605平・断面図	54
第102図	SB605-SK75土層（南西から）	54
第103図	SB605-SK152土層（南西から）	54
第104図	SB605柱列確認状況（南東から）	54
第105図	SB605出土遺物実測図	55
第106図	SB605出土遺物	55
第107図	SB606出土遺物実測図	55
第108図	SB606出土遺物	55
第109図	SB606平・断面図	56

第110図	SB606掘方半裁状況（北西から）	57
第111図	SB606完掘状況（北西から）	57
第112図	SB607平面図	58
第113図	SB607出土遺物実測図	58
第114図	SB607出土遺物	58
第115図	SB608出土遺物実測図	59
第116図	SB608出土遺物	59
第117図	SB610出土遺物実測図	59
第118図	SB610出土遺物	59
第119図	SB608平・断面図	60
第120図	SB608完掘状況（南西から）	61
第121図	SB608完掘状況（北西から）	61
第122図	SB610平・断面図	62
第123図	SB610-SK189遺物出土図	63
第124図	SB610-SK189遺物出土状況（南から）	63
第125図	SB610-SK210土層（北西から）	63
第126図	SB610完掘状況（南西から）	63
第127図	SA613平・断面図	64
第128図	SA613完掘状況（北西から）	64
第129図	SA613出土遺物実測図	64
第130図	SA613出土遺物	64
第131図	SB618平・断面図	65
第132図	SB619平・断面図	66
第133図	SB619出土遺物実測図	67
第134図	SB619出土遺物	67
第135図	SB620平・断面図	67
第136図	SB620出土遺物実測図	68
第137図	SB620出土遺物	68
第138図	SE196平・断面図	69
第139図	SE196遺物出土状況（南から）	69
第140図	SE196土層（南から）	69
第141図	SE196完掘状況（南から）	69
第142図	SE196出土遺物実測図	70
第143図	SE196出土遺物	70
第144図	SK119平・断面図	72

第145図	3面目土坑出土遺物実測図	73
第146図	3面目土坑出土遺物	74
第147図	包含層掘削風景（南西から）	74
第148図	下層確認トレンチ配置図	75
第149図	包含層C2区遺物出土状況（南から）	75
第150図	D3区弥生土器出土状況（西から）	77
第151図	西区下層確認状況（西から）	77
第152図	東区下層確認状況（西から）	77
第153図	包含層出土遺物実測図	78
第154図	包含層出土遺物	79
第155図	包含層出土遺物実測図	80
第156図	包含層出土遺物	81
第157図	包含層出土遺物実測図	82
第158図	包含層出土遺物	83
第159図	弥生土器包含層出土遺物	83
第160図	弥生土器包含層出土遺物実測図	84
第161図	弥生土器包含層出土遺物	85
第162図	三山木遺跡調査区配置図（1次～6次）	97

付表目次

付表1	三山木遺跡調査一覧表	4
付表2	掘立柱建物一覧	86
付表3	柱列状遺構一覧	86
付表4	遺物観察表	87

1. はじめに

三山木遺跡は京都府京田辺市三山木の近鉄・JRの三山木駅周辺に広がる弥生時代から中世にかけての遺跡として知られている。

陸備建設株式会社では、JR三山木駅東隣で共同住宅建設を計画され、平成25年7月2日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出をされた。これを受け、京田辺市教育委員会では、事業者の協力の下、平成25年7月18日に試掘確認調査を行ったところ、古代の土器を多く含む層や掘方・溝状の遺構が建設予定地域のほぼ全面でみつかったことから、本格的な発掘調査が必要と判断した。同社では、発掘作業を株式会社イビソク関西支店に委託、当委員会と二者で平成25年8月13日に発掘調査に関しての覚書を締結、現地作業は平成25年8月22日から開始し、平成25年10月31日に終了した。その後、整理作業を株式会社イビソク関西支店で行った。

なお、事業者である陸備建設株式会社の方々をはじめ、関係機関・地元住民の方々、また酷暑・雨天のなかにおいても作業に従事された皆さん、その他多くの方々のご協力によって今回の調査を実施することができた。記して感謝の気持ちをしたい。



第1図 調査地位置図

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

京田辺市は、南山城平野のほぼ中央を流れる木津川左岸に位置し、東側には木津川によって形成された沖積地が広がる。北は京都府八幡市、東は木津川を挟んで城陽市・綾喜郡井手町、南は相楽郡精華町、西は大阪府枚方市・奈良県生駒市と接している。市南西部は生駒山系から派生する丘陵地で高く、大阪層群と呼ばれる砂礫層から成る。三山木遺跡は市中心部よりやや南側の近鉄・JR三山木駅周辺に位置し、低丘陵端部にあたる。遺跡の範囲は、東西300m・南北300mである。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡をみてみると縄文時代の遺跡では、草創期・早期の例は現在のところないが、新遺跡からは前期の遺物・中期末の縦穴住居跡などがみつかっている。また、稻葉遺跡・興戸遺跡などからは晩期の遺物がみつかっているほか、調査地すぐ西方の山崎神社からは石棒・異形石器がみつかっている。

弥生時代には、前期の遺跡として方形周溝墓がみつかった稻葉遺跡や土坑などがみつかった宮ノ下遺跡(47)がある。中期では田辺城下層(24)や南山遺跡(45)で縦穴住居跡などが、南垣内遺跡(31)では方形周溝墓がみつかっている。後期になると縦穴住居跡や方形周溝墓の飯岡遺跡(33)・縦穴住居跡が20数基みつかった田辺天神山遺跡(23)がある。

古墳時代の南山城地域は、3世紀末に築造されたと考えられる椿井大塚山古墳(木津川市)がある。調査地北東の飯岡丘陵では前期には前方後円墳の飯岡車塚古墳(34)、中期には円墳のゴロゴロ山古墳(35)・薬師山古墳(36)・トヅカ古墳(37)、後期には東原古墳・飯岡横穴(38)などが相次いで造られている。同じ後期ではすぐ西方の山崎神社周辺には山崎古墳群(3基)が存在する。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、本調査地から北西へ約2kmに興戸遺跡(29)が、北方約400mに二又遺跡(44)、南方へ約600mに三山木廃寺跡(8)がある。興戸遺跡は東西700m・南北1000mの範囲にかけて広がり、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが昭和62年度から平成3年度にかけて実施した調査では、掘立柱建物群・土地区画に関連した遺構などがみつかり、奈良時代の山陽道とともにその東側3町分の土地区画復原ラインが想定されている。三山木廃寺は瓦からみて7世紀末頃に建立されたものである。

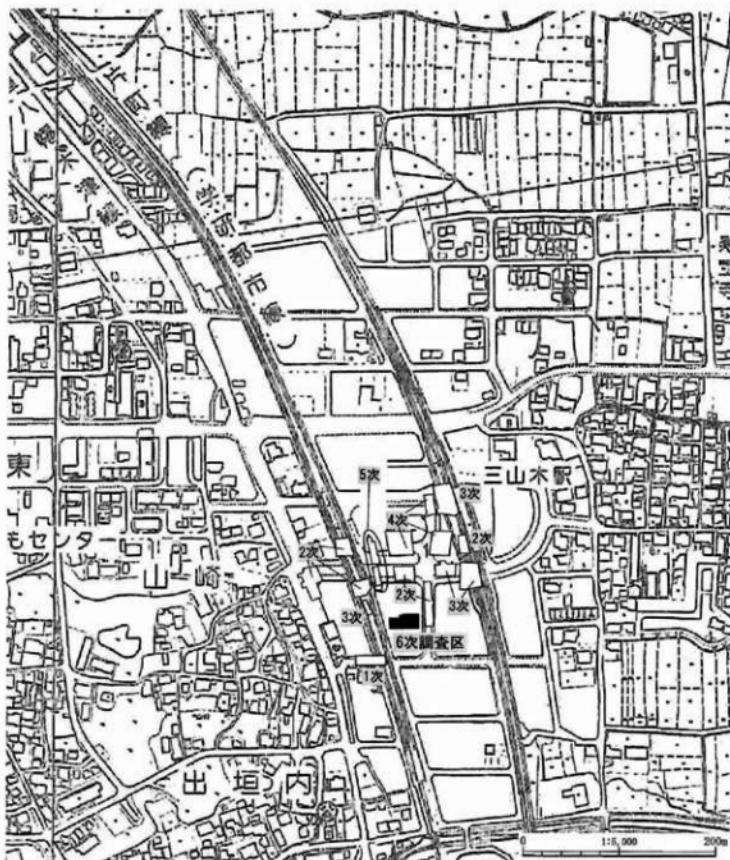
『統日本紀』和銅4年(711)には「山本駅」が設置されたことが記述され、二又遺跡・三山木遺跡の付近を当時の山陽道が通り、近鉄・JR三山木駅周辺に山本駅が想定されている。平成10年度以降、両遺跡を発掘調査してきたが、道路関係遺構は確認されていない。二又遺跡からは、平成10年度発掘調査時に山本駅の機能を引き継いだと考えられる平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡などはみつかったが、考古学的に奈良時代の駅跡を確定できるまで

には至っていない。また、三山木遺跡の発掘調査においても、山本駅の所在を確定できる遺構・遺物を確認できていないため、今回の発掘調査で山本駅に関連する遺構・遺物が確認されるのではないかと期待された。



- | | | | |
|--------------|------------|-----------------|-----------|
| 1 三山木遺跡 | 13 宮津古墳 | 25 田辺遺跡 | 37 トヅカ古墳 |
| 2 南山城跡 | 14 宮ノ口古墳群 | 26 舞戸古墳群・舞戸丘陵遺跡 | 38 飯岡1号横穴 |
| 3 口駒ヶ谷古墳 | 15 菖蒲谷古墳 | 27 舞戸宮ノ前窓跡 | 39 飯岡2号横穴 |
| 4 口駒ヶ谷遺跡 | 16 奥山池遺跡 | 28 舞戸宮ノ前遺跡 | 40 古屋敷遺跡 |
| 5 上谷浦遺跡 | 17 普賢寺跡 | 29 舞戸遺跡 | 41 田中東遺跡 |
| 6 山崎古墳群・山崎遺跡 | 18 大御堂裏山古墳 | 30 大切遺跡 | 42 田中西遺跡 |
| 7 西羅遺跡 | 19 下司古墳群 | 31 南垣内遺跡 | 43 東角田遺跡 |
| 8 三山木廐寺跡 | 20 主むし谷窓跡 | 32 宮ノ後遺跡 | 44 二又遺跡 |
| 9 佐牙垣内遺跡 | 21 新宗谷館跡 | 33 飯岡遺跡 | 45 南山遺跡 |
| 10 江津古墳 | 22 新宗谷窓跡 | 34 飯岡車塚古墳 | 46 直田遺跡 |
| 11 佐敷田遺跡 | 23 田辺天神山遺跡 | 35 ゴロゴロ山古墳 | 47 宮ノ下遺跡 |
| 12 宮ノ口遺跡 | 24 田辺城跡 | 36 薬師山古墳 | 48 桑町遺跡 |

第2図 主要遺跡図



第3図 周辺地形図

次数	調査期間	調査面積	調査主体	調査担当	年代	検出遺構
第1次	平成11年1月7日 ～平成11年2月5日	約300m ²	京田辺市 教育委員会	鷹野一太郎 五百鶴順一	绳纹晩期 ～平安時代	溝・土坑
第2次	平成11年6月17日 ～平成11年10月28日	約1,800m ²	(財) 京都府 文化財 調査研究センター	岡崎研一 田代弘	弥生前期 ～鎌倉時代	土坑・溝・掘立柱 建物跡・井戸
第3次	平成12年5月15日 ～平成12年9月28日	約1,400m ²	同上	岡崎研一	平安時代	掘立柱建物跡・ 溝・土坑
第4次	平成13年6月21日 ～平成13年10月26日	約1,300m ²	同上	引原茂治 岡崎研一	弥生時代 ～江戸時代	土坑・溝・掘立柱 建物跡・井戸・池
第5次	平成14年5月20日 ～平成14年10月30日	約350m ²	同上	岡崎研一 中村周平	弥生前期 ～平安時代	溝・掘方・土坑
第6次	平成25年8月22日 ～平成25年10月31日	約440m ²	京田辺市 教育委員会	鷹野一太郎	弥生前期 ～平安時代	溝・掘立柱建物跡 ・柱列・井戸

付表1 三山木遺跡調査一覧表

3. 調査の経過

(1) 試掘調査

今回の発掘調査は、JR三山木駅東側の集合住宅建設事業に伴うものである。本調査に着手する前に調査範囲の確定と地層堆積状況の把握を目的に、建設予定地内に計4か所トレーニングを設定し試掘調査を行った。

調査区西側のトレーニングは湧水が激しく砂質盛土の流出が著しかったが、地表から約1.6m掘り下げた段階で直径0.4mの土坑を1基確認した。他に明確な遺構の確認はなかったが、全てのトレーニングで奈良時代の遺物を中心とした包含層を確認した。

このため、開発計画地内一帯に奈良～平安時代を中心とした遺跡が広がっていると判断し、建設予定全範囲（約440m²）を対象に発掘調査を実施することとした。



第4図 調査前風景（西から）

(2) 本調査

8月19日より調査区周辺にフェンスを設置し、合わせて調査資機材の搬入を行った。8月20日～21日にかけ調査区設定を行い、翌22日から重機による表土掘削を開始した。なお、排土置場を調査区内に確保するため、調査は東西に区を分けて行った（第8図参照）。

調査は西側より開始した。表土掘削は、壁面崩落防止のため、調査区際に段掘りを行うこととした。加えて調査区西際は、試掘時に確認した湧水に対応するため、土留めによる壁面の補強を行った。8月31日には1面目までの表土掘削を終了し、人力による検出作業後全体撮影を行った。その後、9月4日までに1面目の掘削・記録を終え、掘立柱建物跡が検出された2面目の調査へと移った。9月11日までに2面目の掘削・記録を終え、3面目の検出を行い、複数の掘立柱建物跡や土坑を確認した。9月28日までに3面目の掘削・記録・調査区壁面土層記録を終え9月30日に西区の下層確認を行い埋戻し作業に入った。



第5図 土留め作業風景（北東から）



第6図 調査風景（北西から）

東区は10月8日に1面目までの表土掘削を終え、人力による検出作業後全体撮影を行い、同日内に1面目の調査を終了した。2・3面目は、検出レベルに差が無く、西区に比べ遺構の密度が低かったため合わせて確認し掘削に入った。

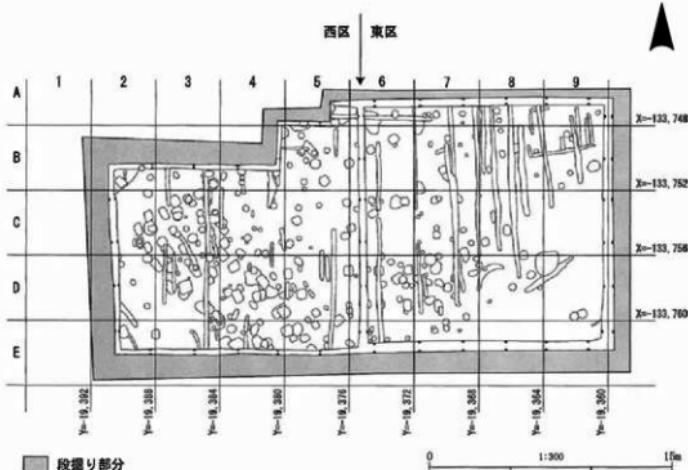
10月19日午後より現地説明会を開始した。悪天候にも関わらず約80名の来場があり盛況の内に終了した。

10月22日2・3面の掘削・記録・調査区壁面土層記録を終え、同23日に東区下層確認を行った。調査終了後、同31日までに埋戻し作業・調査資機材撤収を行い現地での作業を終了した。

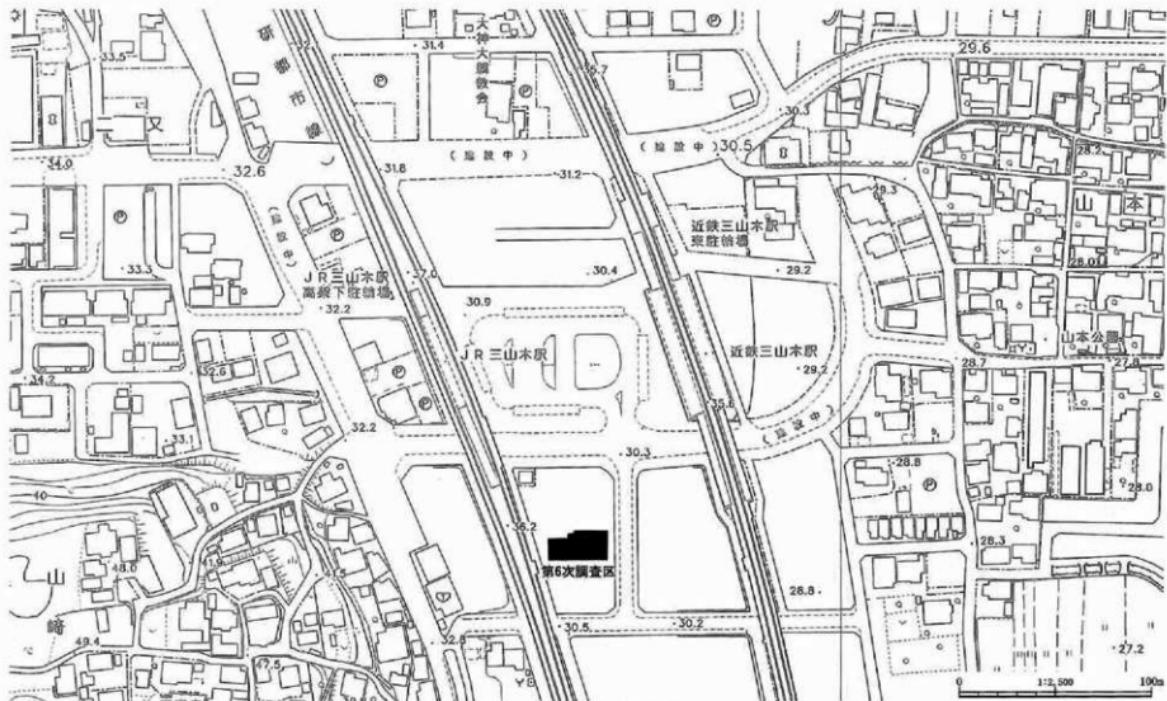
調査に関し、遺構の位置管理・遺物取上げのために任意で4mごとにグリッドを設定した。南北にアルファベット(A～E)、東西にアラビア数字(1～9)を用い、調査区西角を起点として区割りした(第8図参照)。測量は、手実測と光波測量器(トータルステーション)による測量、写真図化を併用した。光波による測量に際し、公共座標(日本測地系)を用いた。写真撮影には主として35mmカメラ(リバーサル・カラー)・コンパクトデジタルカメラを用い、完掘状況撮影等の主要撮影には、中判カメラ(白黒、リバーサル)による撮影を加えた。



第7図 現地説明会風景



第8図 調査区地区割図



第9図 調査区位置図

4. 調査成果

(1) 基本層序

調査区内は、北西から南東にかけ緩やかに傾斜している。北西側・南東側にのみ確認できる包含層があるが地形傾斜に伴う堆積差であり、基本的な土層堆積は調査区全体を通して概ね共通している。地表から1.2～1.6m地点まで表土と造成に伴う盛土、旧耕作土が堆積している。西区中央より東側は、旧耕作に伴う削平の影響が特に顕著である。床土を含む耕作層を剥がすと厚さ約0.2mの包含層（V層、暗灰黄色土）がある。遺物の堆積が極少量であることから、漸意層と判断した。V層を剥がすと遺物を多量に含む層があり（VI層、暗褐灰色土）、耕作溝群を検出したため、1面目として調査を行った。

調査区北西側（IX層、黒褐色土）、南東側（VII層、灰黄褐色土・VIII層、褐灰色土）にのみ確認できる包含層は、地形傾斜に伴う部分的な堆積と考える。VI～IX層を剥がすと地表から1.5～1.8m地点で古代遺構面（X層、浅黄色粘質土）となる。西区のみに確認できるIX層面にて、掘立柱建物跡を含む遺構を検出したため2面目と想定した。IX層の堆積が無い範囲に関しては、古代遺構面で遺構埋土の色・質、建物跡の方位などから2面目に該当するものを選別し、それ以外を3面目と判断した。

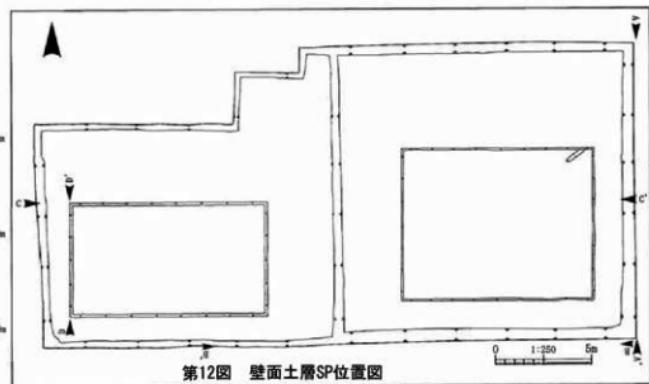
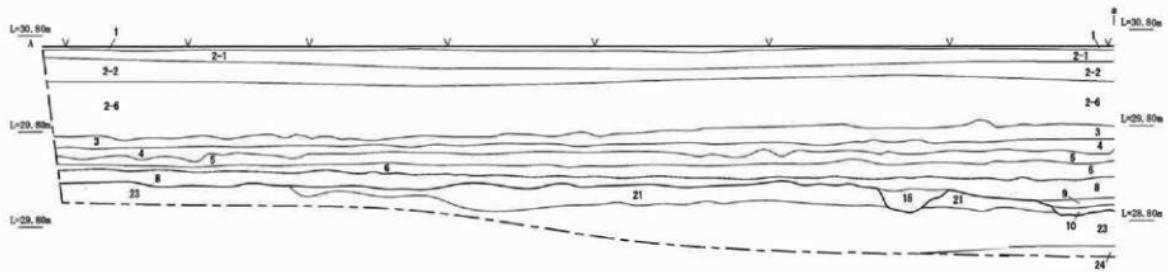
古代遺構面から下層は自然堆積が続くが、約0.6mの地点で弥生土器を大量に含む包含層（XVII層、オリーブ黒色砂質土）を確認した。弥生土器包含層より下層に明確な遺構検出面は無く、0.7m（地表から約3.2m）の地点で砂層（XXIII層、灰色砂層）となる。



第10図 西区（E5区）南壁面（北から）



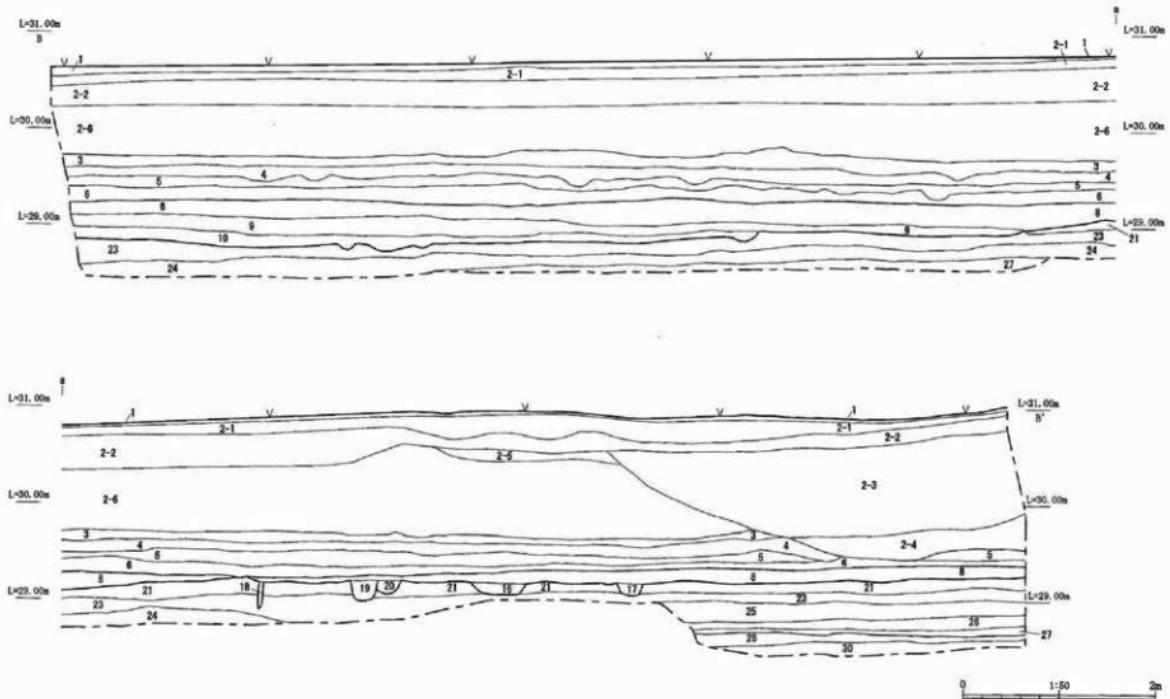
第11図 東区（C9区）下層北壁面（南から）



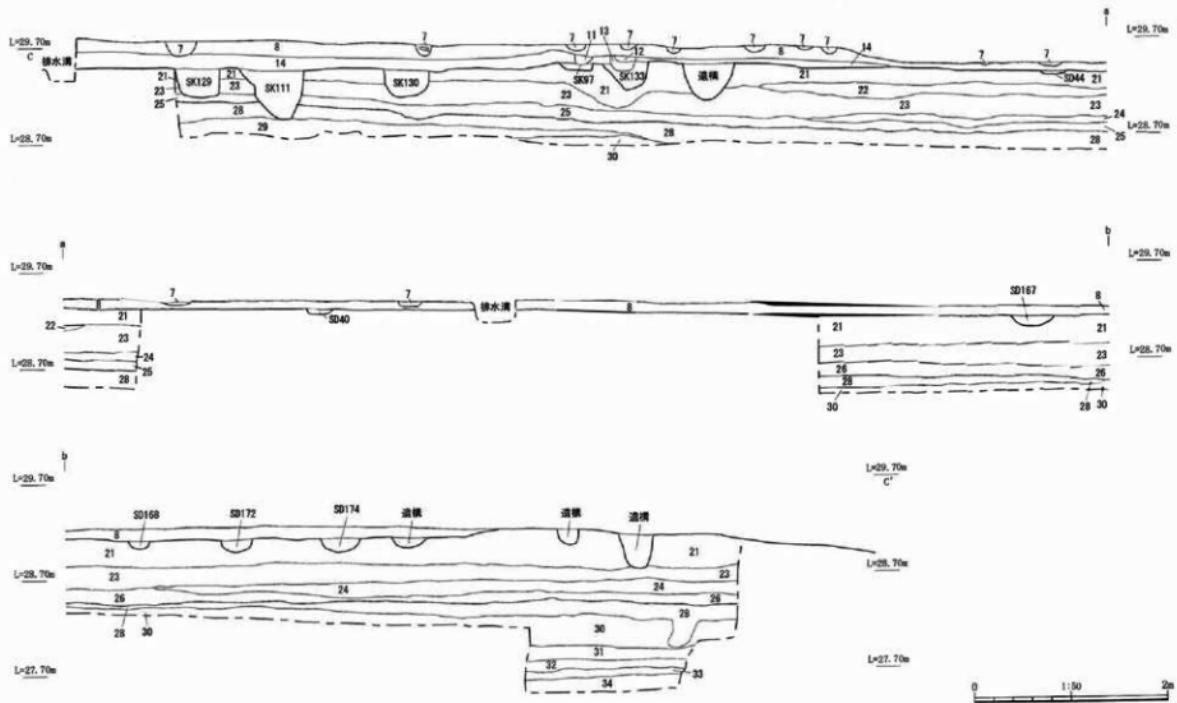
第12図 壁面土層SP位置図

0 1:50 2m

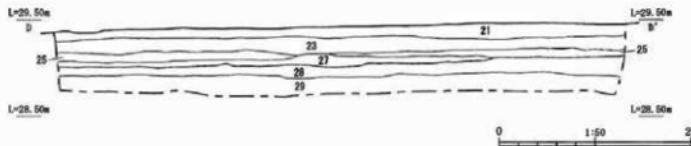
第13図 調査区東壁面土層図



第14図 調査区南壁面土層図



第15図 調査区中央畔土層図



第16図 西区下層西壁面土層図

1 表土

- 2-1 I 層 造成に伴う盛土 しまりあり、礫φ10~15 cm混じり
- 2-2 I 层 造成に伴う盛土 しまりが非常に強い、礫φ2~5 cm混じり
- 2-3 I 层 造成に伴う盛土 しまりあり、砂礫混じり
- 2-4 I 层 造成に伴う盛土 しまりあり、細砂多く含む
- 2-5 I 层 造成に伴う盛土 しまりあり、砂礫混じり
- 2-6 I 层 造成に伴う盛土 しまりあり、砂礫混じり
- 3 II 層 旧耕作土 5Y2/1 黒色土 (やわらかい)、細砂多く含む、礫φ0.5 cm多く含む)
- 4 III 層 旧耕作土 5Y6/1 灰色土 (しまりあり、細砂多く含む、礫φ0.5~2 cm多く含む)
- 5 IV 層 床土 5Y5/3 灰オリーブ色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 6 V 層 包含層 2.5Y5/2 増灰黄色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 7 10YR5/1 暗灰色土 (しまりあり、褐色ブロック状φ1 cm少量含む、炭化物φ1 cm少量含む、細砂多く含む)→耕作溝
- 8 VI 層 包含層 1 面目検出面 10YR5/3 増暗灰色土
(しまりあり、酸化鉄ブロック状φ2 cm全体に含む、細砂多く含む)
- 9 VII 層 包含層 (下層) 10YR5/2 灰暗灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 10 VIII 層 包含層 (下層) 10YR4/1 暗灰色土 (しまりあり、炭化物φ1~2 cm少量含む、細砂多く含む)
- 11 10TR4/1 暗灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 12 10TR5/1 暗灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)→SD12
- 13 10TR4/1 暗灰色土 (しまりあり、ベース土ブロック状φ2 cm少量含む、細砂多く含む)→SD12
- 14 IX 層 包含層 (下層) 2.5Y3/1 黒褐色土
(しまりあり、ベース土ブロック状φ2~4 cm少量含む、炭化物φ2 cm少量含む、細砂多く含む)
- 15 10TR4/1 暗灰色土 (しまりあり、炭化物φ0.5~1 cm少量含む、細砂多く含む)→SE196に切られる構
- 16 10YR5/1 暗灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 17 10YR5/1 暗灰色土 (しまりあり、φ0.5 cm炭化物少量含む、細砂少量含む)
- 18 10YR5/1 暗灰色土 (やわらかい)、細砂少量含む)
- 19 10YR5/1 暗灰色土 (しまりあり、炭化物φ1 cm少量含む、細砂多く含む)
- 20 2.5Y5/1 黄灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 21 X 層 2・3 面目検出面 2.5Y7/3 浅黄色粘質土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 22 XI 層 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 23 XII 層 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (しまりあり、細砂大量に含む、炭化物φ1 cm少量含む)
- 24 XIII 層 2.5Y7/2 灰黄色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 25 XIV 層 2.5Y7/1 灰白色砂質土 (しまりあり)
- 26 XV 層 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (やわらかい)、細砂多く含む)
- 27 XVI 層 5Y5/1 灰色粘質土 (やわらかい)、細砂多く含む)
- 28 XVII 層 未成土器包含層 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (やわらかい、礫φ0.5~1 cm上層に含む、細砂少量含む)
- 29 XVIII 層 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 (やわらかい、細砂少量含む)
- 30 XIX 層 10Y4/2 オリーブ灰色砂質土 (やわらかい、礫φ1~2 cm多く含む、細砂多く含む)
- 31 XX 層 5Y5/1 灰色粘質土 (やわらかい)、炭化物φ0.5~1 cm少量含む、細砂多く含む)
- 32 XXI 层 5Y4/1 灰色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 33 XXII 层 5Y5/2 灰オリーブ色土 (しまりあり、細砂多く含む)
- 34 XXIII 层 5Y6/1 灰色砂層 (しまりあり)



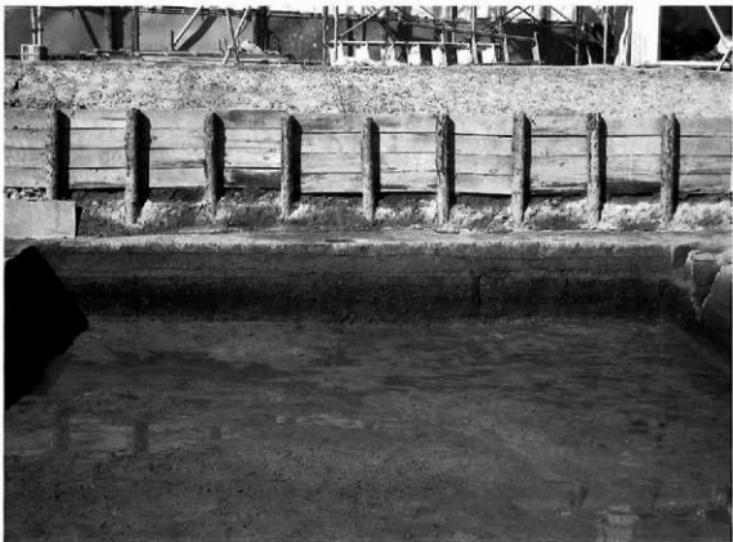
第17図 西区中央群土層（南西から）



第18図 西区南壁面土層（北から）



第19図 西区下層確認北壁面土層（南から）



第20図 西区下層確認西壁面土層（東から）



第21図 東区東壁面土層（西から）



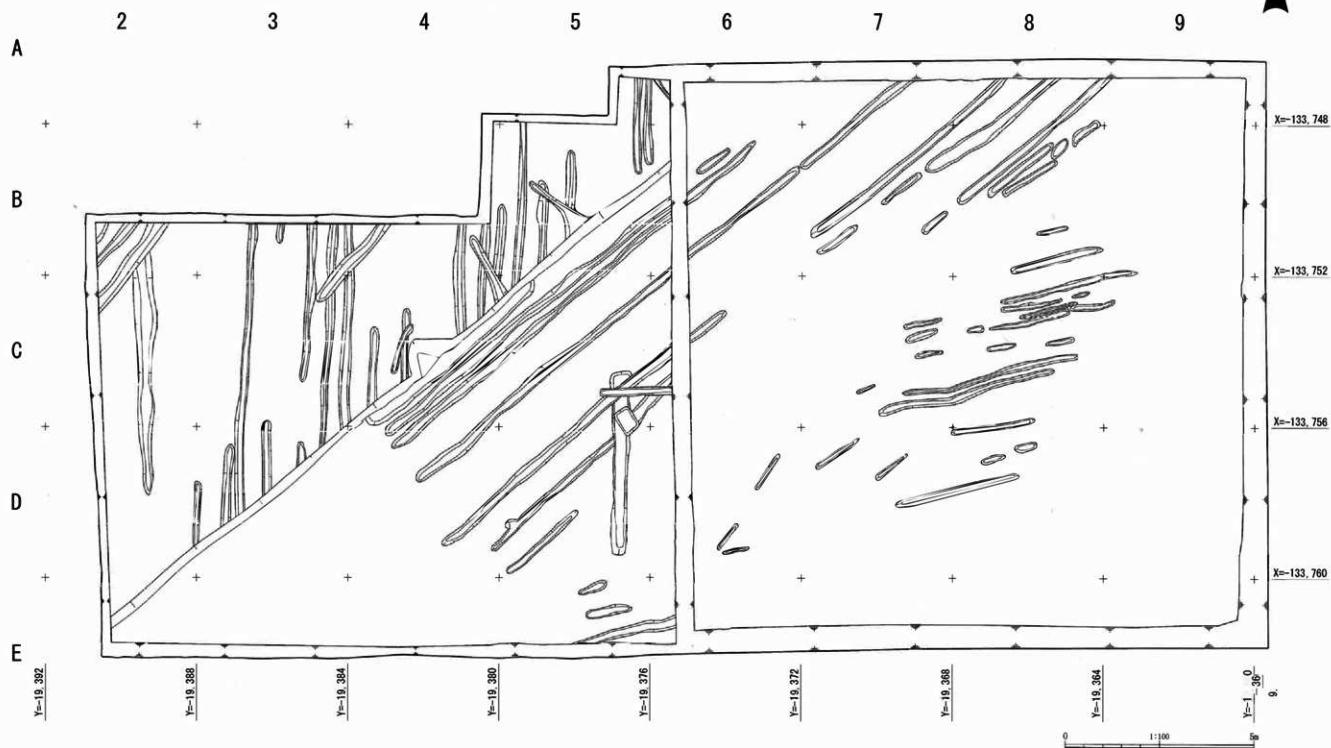
第22図 東区南壁面土層（北西から）



第23図 東区下層確認北壁面土層（南から）



第24図 東区下層確認北壁面土層②（南から）



第25図 1面目造構配図 (耕作溝・不耕土坑)

(2) 遺構・遺物

VI層面で1面目、IX・X層面にて2面目、X層面にて3面目を検出した。1面目で検出した遺構は耕作溝群と土坑である。西区に見られる北東から南西にかけての段落ちは、近代以降の耕作時に行われた区割りを示している。調査の簡略化を図るため、1面目では遺構No.を割当てていない。

2面目で検出した遺構は耕作溝・土坑・掘立柱建物跡・祭祀遺構、3面目で検出した遺構は土坑・掘立柱建物跡・柱列・井戸・溝である。掘立柱建物跡は2面目では主軸方位が正方位（平安時代）、3面目では主軸方位が正方位から大きく西に傾くもの（奈良～平安時代）に分かれる。なお、検出した掘立柱建物跡・柱列は6次調査と既調査検出分を区別するため600番台にて管理した。また、井戸を除く穴状遺構全てを土坑（SK）として管理し、祭祀遺構のみSXと表記した。

下層確認は西・東区とともに、調査区内に任意で範囲を設定し行った（第148図参照）。遺物の出土はあったが、遺構は検出していない。

遺物はテンパコで16箱出土している。1面目耕作溝から土師器・須恵器・瓦、2面目からは土師器・須恵器・製塙土器・黒色土器、3面目からは土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦質土器・木製品（柱材）、弥生土器包含層からは弥生前期を中心とする土器が出土している。

本章では、遺構ごとに合わせて遺物を記述する。なお、遺構・遺物の詳細については別表の遺構一覧表・遺物観察表を参照されたい。

① 1面目

耕作溝

（第25・28・29・30・31図）

<概要>

調査区全体で耕作溝を確認した。長さは最長で約13.0m、幅0.15～0.4m、深さ0.1～0.15mを測る。溝の主軸方位は、南北軸、東西軸、南北軸から北東・北西側に傾く軸の4方向がある。埋土は褐色灰色土で炭化物を含む。溝内から出土した遺物は主に奈良～平安時代のものであるが、極わずか飛鳥時代の遺物を確認した。2面目の当該時期が平安時代であることから、平安以降～中世期にかけて少なくとも4時期に渡って耕作が行われていたと考えられる。

<出土遺物>土師器：1～3、須恵器：4～9

1・2は杯である。1は内外面ともにナデ



第26図 西区1面目作業風景（北から）



第27図 東区1面目作業風景（南東から）

が施される。2は体部から口縁部にかけ斜めに立ち上がり口縁端部は垂直気味になる。3は皿で、体部から口縁部にかけ外反気味にのびる。8世紀末～9世紀初頭のものと考える。

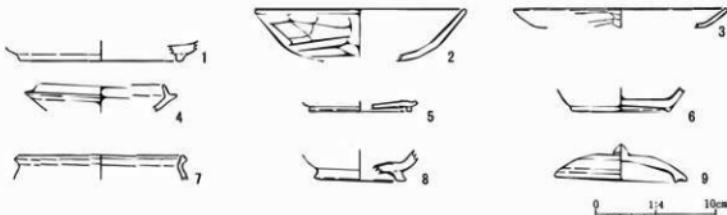
4は杯身である。立ち上がりは内上方を向き短い。体部から底部は欠損していて不明である。5・6は杯で底部縁に高台を張り付ける。平坦な底部から内湾しながら立ち上がる。7は鉢である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は内上方に尖る。8は壺底部である。高台はやや外側にふんばる。9は口縁内面にかえりを有す杯G蓋である。7世紀後半～10世紀初頭のものと考える。



第28図 西区1面目完掘状況(南東から)

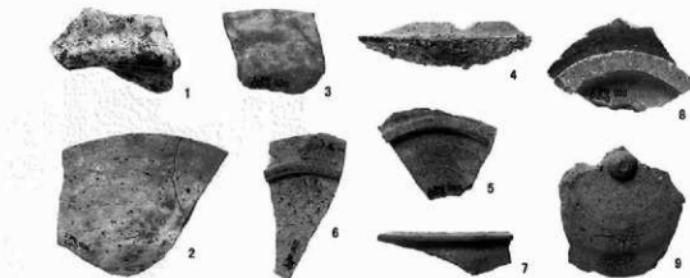


第29図 東区1面目完掘状況(西から)

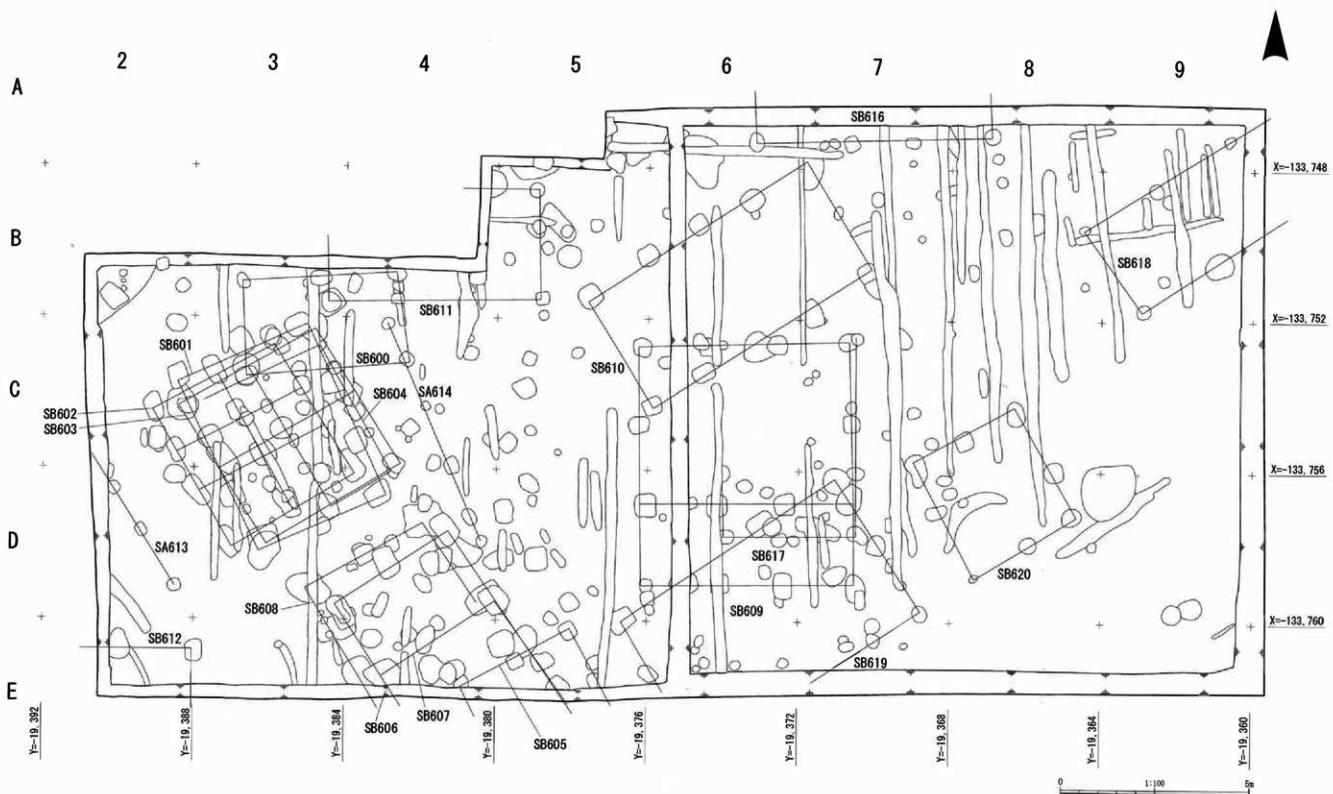


土師器杯:1～2 土師器皿:3 須恵器杯身:4 須恵器皿:5・6 須恵器鉢:7 須恵器壺:8 須恵器杯G蓋:9

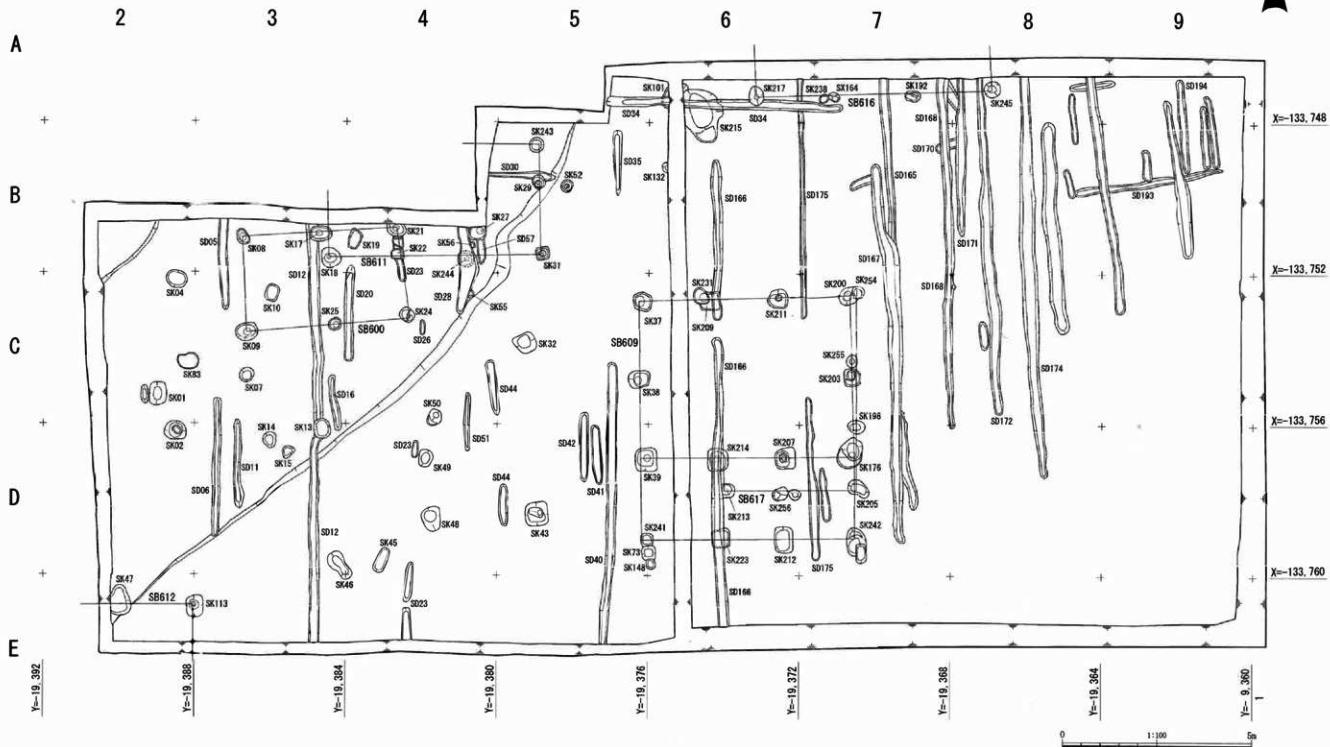
第30図 耕作溝内出土遺物実測図



第31図 耕作溝内出土遺物



第32図 2・3面造構配置図



第33図 2面目構成配置図

② 2面目

掘立柱建物跡

SB600 (第34・35・36・37・38・39・40図)

<概要>

西区北側で検出した2間×1間の東西棟側柱建物である。SK08・09・17・21・24・25からなる。桁行長は4.1m、梁行長は2.4mを測る。建物の主軸方位はN 5° Wで、ほぼ正方位である。掘方径は0.32～0.6m、深さは0.16～0.32mを測り、平面形は円形と楕円形のものがある。桁行柱間の距離は平均で2.0mを測る。掘方内からは奈良～平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:10・11

10は杯である。体部から口縁部にかけて薄くなり、口縁端部はやや尖る。11は皿である。体部から口縁部にかけてやや垂直気味にのびる。8世紀後半～9世紀初頭のものと考える。

SB609 (第41・42・43・44・45・46・47・48・49・50図)

<概要>

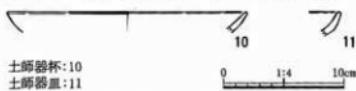
西区から東区にかけて調査区中央南よりで検出した3間×2間の東西棟側柱建物で、南面に庇部をもつ。SK37・38・39・176・200・203・207・209・211・214、庇部SK212・223・241・242からなる。桁行長は5.6m、梁行長は4.2mを測る。建物の主軸方位はほぼ正方位である。掘方径は0.28～0.4m、深さは0.12～0.32mを測り、平面形は円形と楕円形のものがある。桁行掘方間は1.8m、梁行掘方間は2.1mを測る。掘方内からは奈良～平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:12～21、須恵器:22～23、黒色土器:24

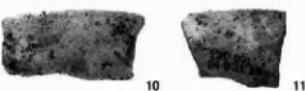
12～16は杯である。12は体部から口縁部にかけて厚くなり口縁端部はやや外反気味に尖る。13・15・16は器壁が薄く15は口縁端部を摘み上げる。14は底部で外面に爪痕が確認できる。17～19は皿で、器壁が薄く口縁端部を内面に折り返す。17は口縁端部外面に1条沈線を施す。20・21は甕の口縁部である。体部から口縁部にかけて「く」の字状に緩やかに外反するものと考える。20は口縁端部を内面上方へ摘み上げ尖り気味に仕上げる。21の口縁端部は外反気味にのびる。主に9世紀前半のものと考える。16は柱穴出土である。

22は高台を付さない杯である。口縁端部はやや外反気味に尖る。底部には窯印と思われる刻印が認められる。9世紀中葉のものと考える。23は口縁内面にかえりを有す杯G蓋である。外面に釉がかかっている。7世紀後半か。

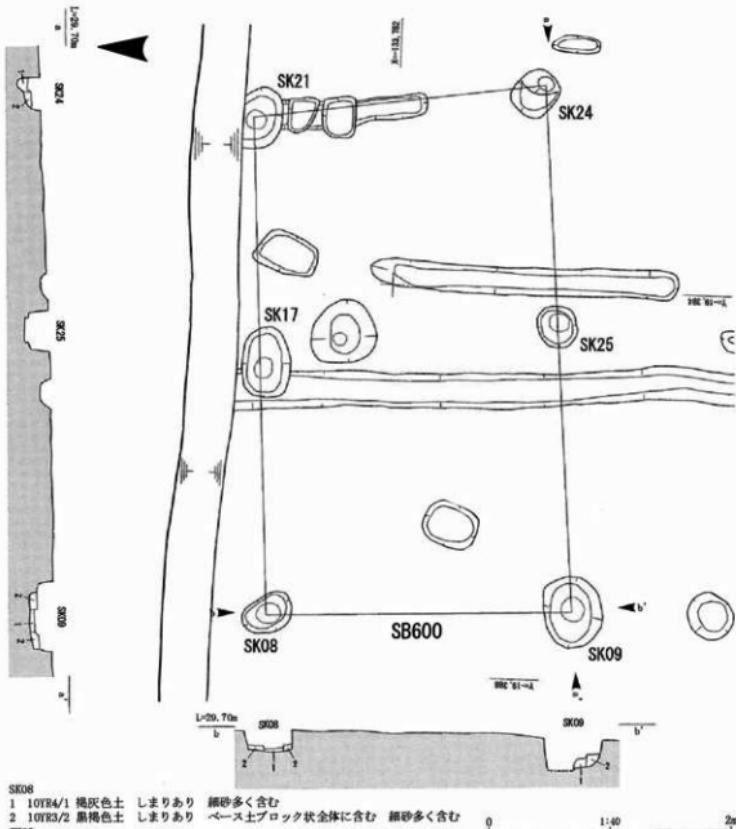
24は杯である。体部から口縁部にかけて外反気味にのび、口縁端部は丸みを帯びる。9世紀中葉のものと考える。



第34図 SB600出土遺物実測図



第35図 SB600出土遺物



第36図 SB600平・断面図



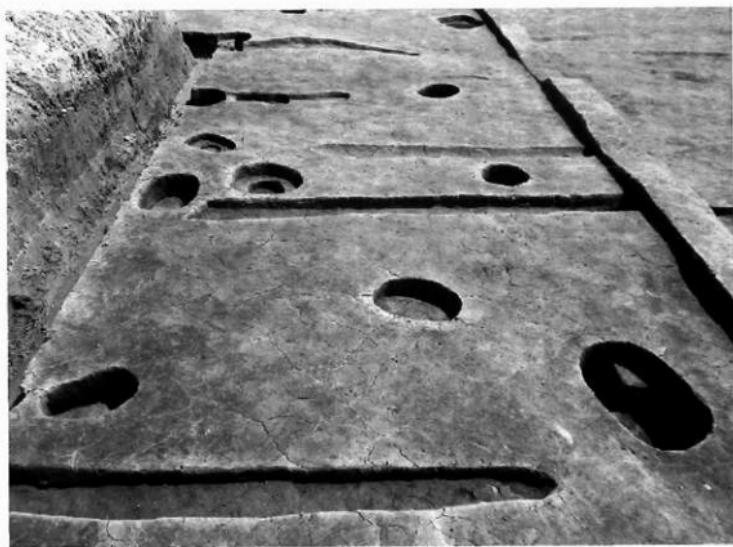
第37図 SB600-SK08土層（東から）



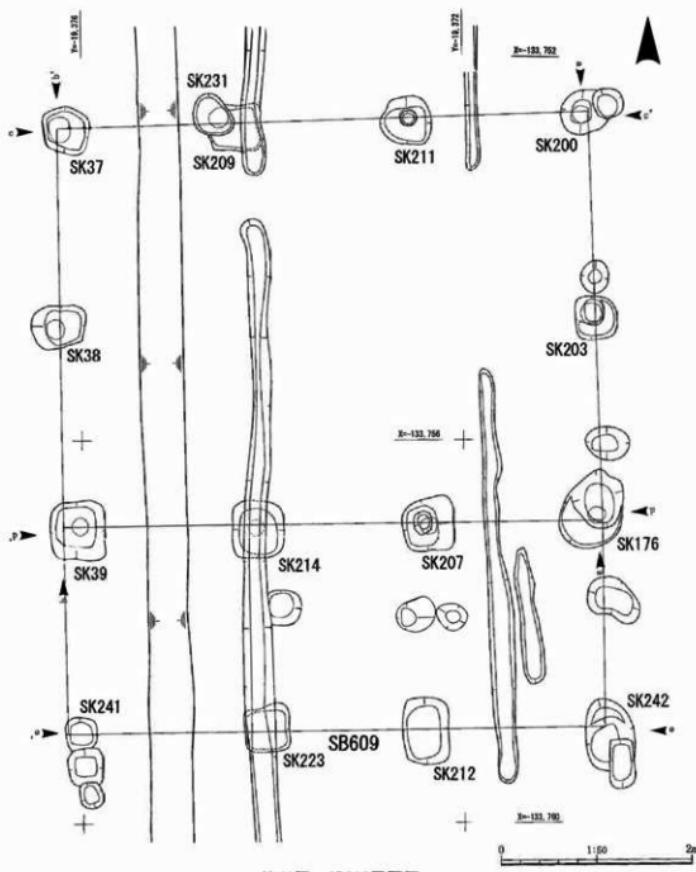
第38図 SB600-SK09土層（北から）



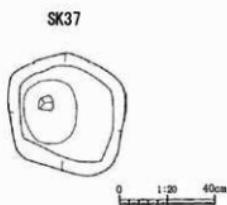
第39図 SB600完掘状況（南から）



第40図 SB600完掘状況（西から）



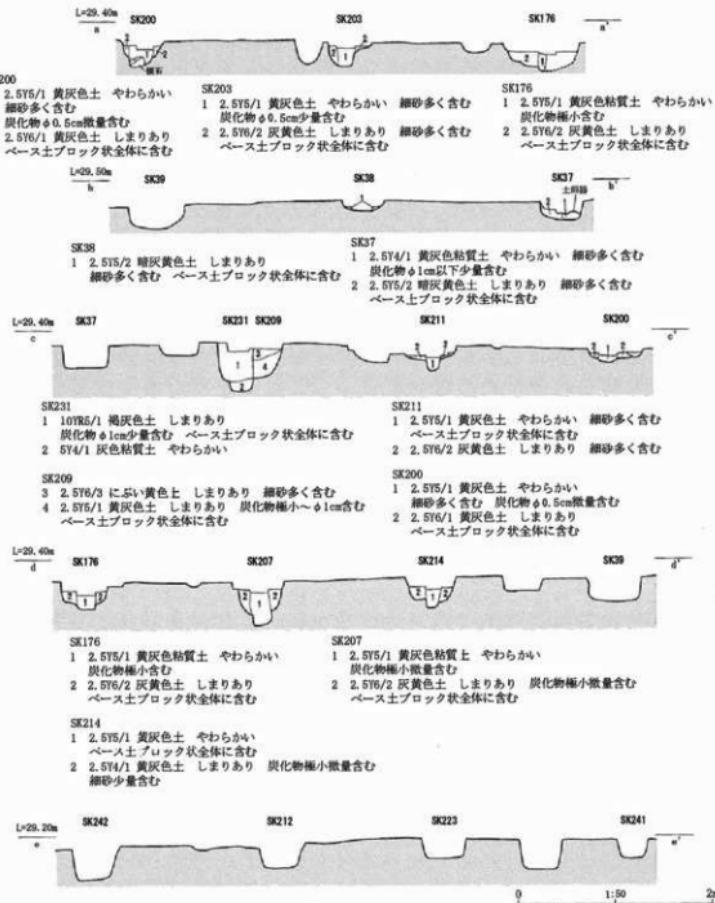
第41図 SB609平面図



第42図 SB609-SK37遺物出土図



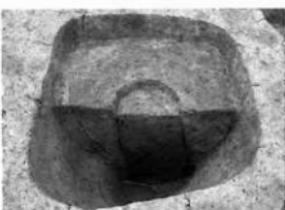
第43図 SB609-SK37土層（東から）



第44図 SB609断面図



第45図 SB609-SK207遺物出土状況（北から）



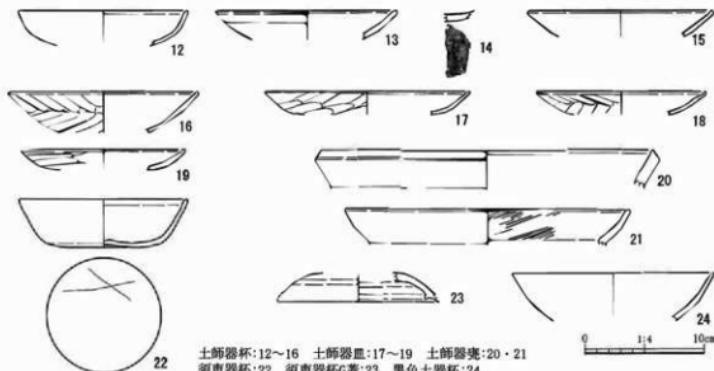
第46図 SB609-SK207土層（北から）



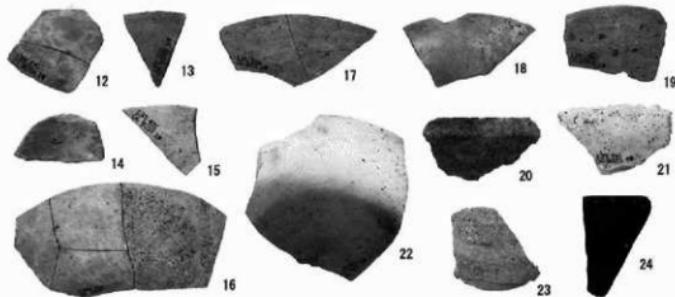
第47図 SB609完掘状況（西から）



第48図 SB609完掘状況（南から）



第49図 SB609出土遺物実測図



第50図 SB609出土遺物

SB611 (第51・52・53図)

<概要>

西区北側で検出した3間×1間の東西棟側柱建物である。SK18・22・31・243・244からなる。調査区外へ延びるため、正確な建物規模は不明であるが、他の建物跡と同様の規模と想定した。桁行長は5.6m、梁行長は2.9mを測る。建物の主軸方位はほぼ正方位である。掘方径は0.12～0.2m、深さは0.15～0.25mを測り、平面形は円形と方形のものがある。桁行掘方間は約1.9mを測る。掘方内 土師器皿:25 黒色土器碗:26 からは平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:25、黒色土器:26

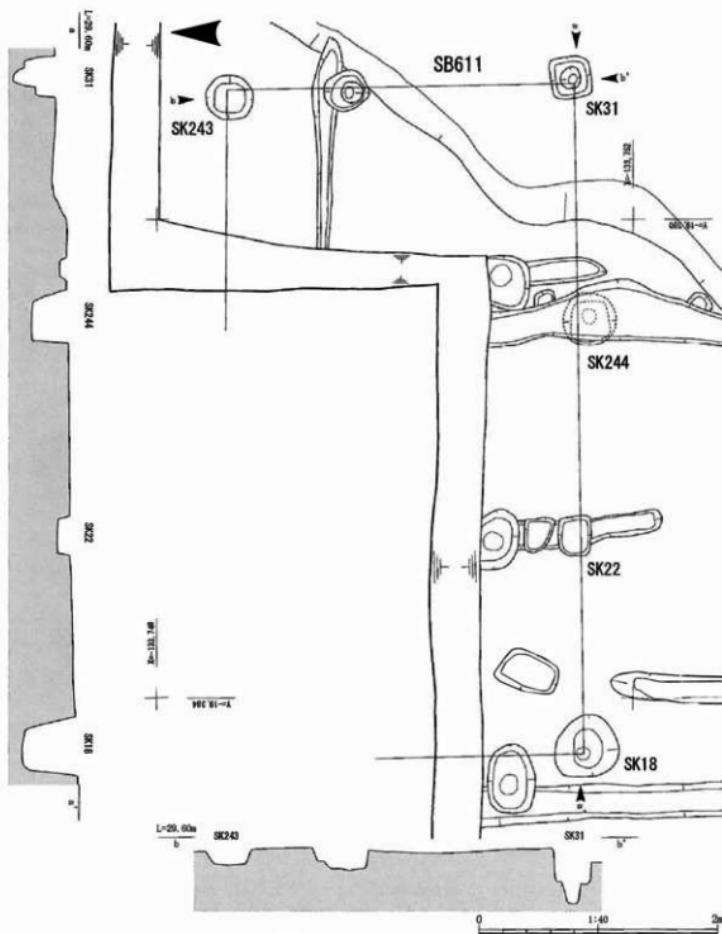
25は皿の口縁部である。口縁端部はやや丸みを帯びる。9世紀後半～10世紀初頭のものと考える。



第51図 SB611出土遺物実測図



第52図 SB611出土遺物



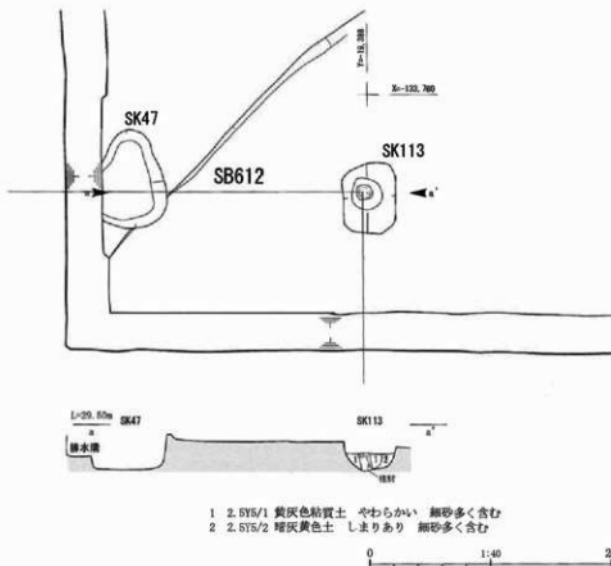
第53図 SB611平・断面図

26は楕である。体部から口縁部にかけて薄く、口縁端部は外反気味に細くなる。9世紀後半～10世紀初頭のものと考える。

SB612 (第54・55・56・57・58図)

<概要>

西区南西隅で検出した1間以上×1間以上の建物である。SK47・113を伴うが、調査区外へ延びるため正確な建物規模は不明である。建物の主軸方位は正方位である。掘方径は



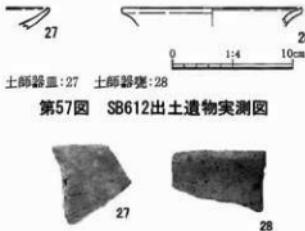
第54図 SB612平・断面図



第55図 SB612完掘状況(東から)



第56図 SB612-SK113土層（南から）



第57図 SB612出土遺物実測図



第58圖 SB612出土遺物

0.41～0.8m、深さは0.24～0.28mを測り、平面形は方形と橢円形のものがある。掘方内からは奈良～平安時代の遺物が出土している。

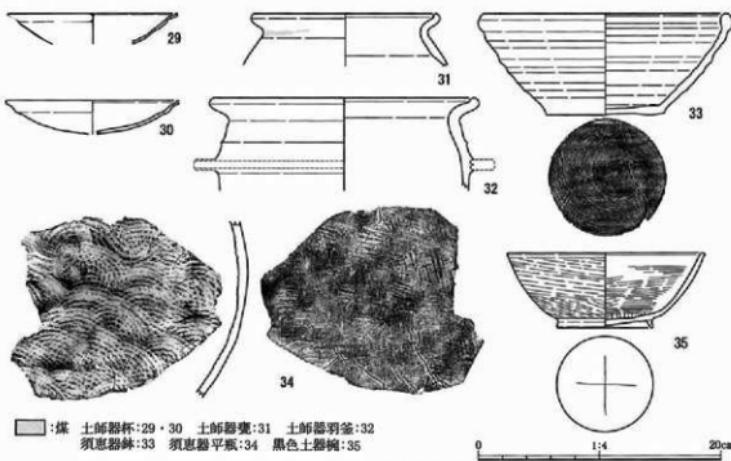
＜出土遺物＞土師器:27・28

27は皿である。口縁端部は内面に折り返す。28は甕の口縁部である。口縁端部をやや上方に摘まみ上げる。8世紀後半～9世紀初頭のものと考える。

SB616 (第59・60・61・62・63・64図)

＜概要＞

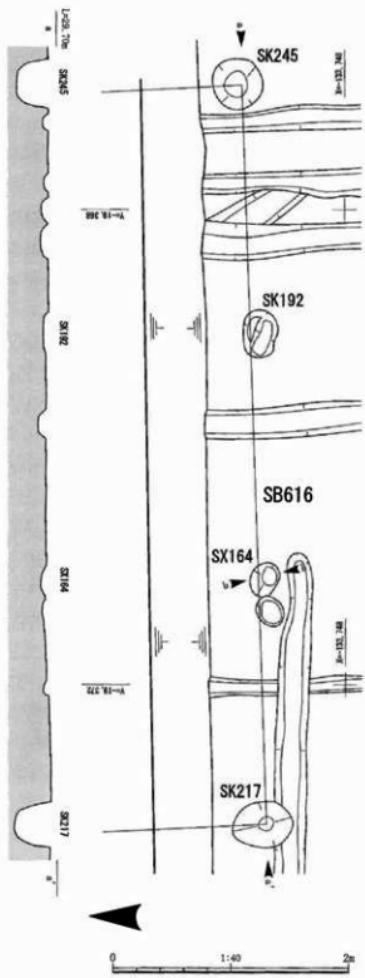
東区北側で検出した3間×1間以上の建物である。SK192・217・245・SX164を伴うが、調査区外へと延びるため正確な建物規模は不明である。桁行長は6.2mを測る。建物の主軸方位は正方位である。掘方径は、0.24～0.48m、深さは0.24～28mを測り、平面形は円形と橢円形のものがある。柱列を成すSX164からは、須恵器鉢(33)の上に黒色土器椀(35)を重ねて須恵器平瓶体部(34)で蓋をした状態で土器類が出土しており、地鎮祭に関連する遺構とも考えられる。掘方内からは平安時代の遺物が出土している。



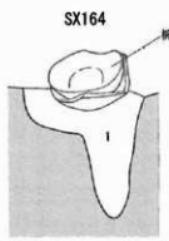
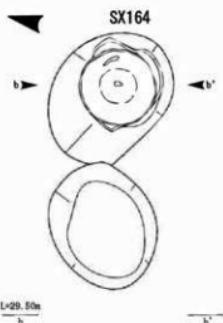
第59図 SB616出土遺物実測図



第60図 SB616出土遺物



第61図 SB616平・断面図



第62図 SB616-SX164断面図・遺物出土図
1 2.5Y5/1 黄灰色土 しまりあり 細砂多く含む
炭化物 φ 0.5cm 量少含む
0 1:10 20cm

第63図 SB616-SX164土層（南西から）



第63図 SB616-SX164土層（南西から）



第64図 SB616-SX164遺物出土状況（東から）

<出土遺物>土師器:29～32、須恵器:33・34、黒色土器:35

29・30は杯である。器壁は薄く、口縁端部は内面に折り返す。31は甕である。口縁端部は内側に折り返す。32は大和産とみられる羽釜である。体部から口縁部にかけて外反気味にのび、口縁端部を上方に摘まみ上げる。10世紀前半のものと考える。

33は篠産の鉢である。やや薄手の底部から内湾気味に立ち上がる。10世紀後半のものと考える。口縁端部は玉縁状を呈す。34は平瓶の体部で、器壁は薄い。

35は貼付高台を有する椀である。体部から口縁部にかけて外反気味にのびる。高台はやや外側にふんばる。高台見込みに「十」字のヘラ搔きが確認できる。10世紀のものと考える。

SB617 (第65・66・67・68図)

<概要>

東区西側で検出した3間以上×2間の側柱建物である。SK198・205・213・254・255・256を伴うが、平安時代以降の耕作による削平の影響により正確な規模は不明である。建物の主軸方位はほぼ正方位である。SB609より新しい。掘方内からは平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:36～38、黒色土器:39

36～38は杯である。36は体部から口縁部にかけて薄くなり、口縁端部はやや丸みを帯びる。37・38は体部から口縁部にかけて外反気味にのび、口縁端部を上方に摘まみ上げる。9世紀後半～10世紀初頭のものと考える。

39は杯である。器壁は薄く、口縁端部は外反気味に細く尖る。9世紀後半のものと考える。

土坑

SK07 (第33・69・70図)

<概要>

西区西側で検出した直径0.3m、深さ0.12mを測る円形土坑である。

<出土遺物>土師器:40

40は杯である。口縁端部はやや外反気味に尖る。

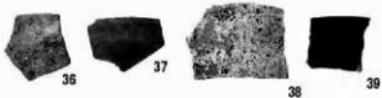
SK32 (第33・69・70図)

<概要>

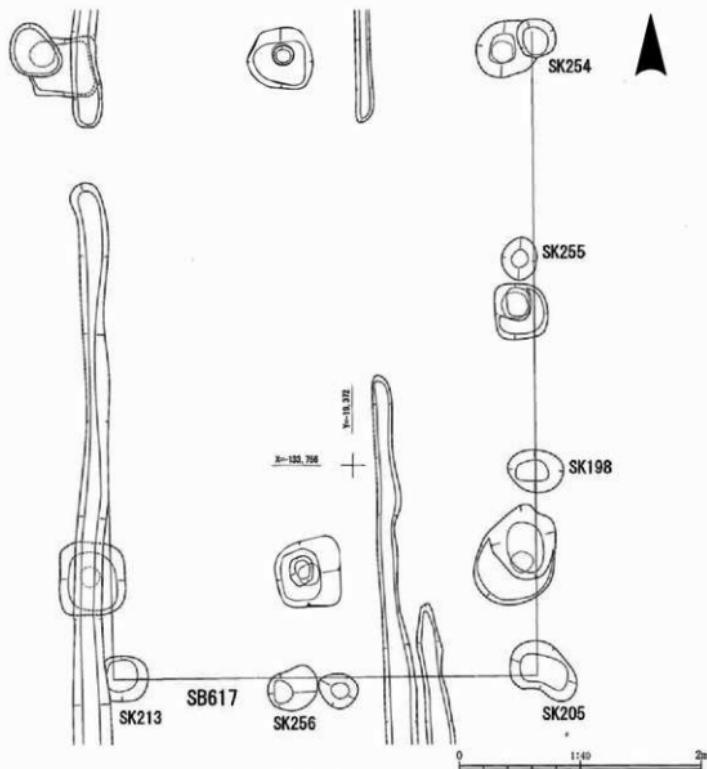
西区東側で検出した平面方形を呈する土坑である。長径0.6m、短径0.5m、深さ0.2mを測る。



第65図 SB617出土遺物実測図



第66図 SB617出土遺物



第67図 SB617平面図



第68図 SB617完掘状況（南から）

<出土遺物>土師器:41・42

41は杯である。器壁は肉厚で口縁端部は外反気味にのびる。42は甕である。小径で体部から口縁部にかけて「く」の字状に緩やかに外反する。口縁端部は薄くなる。

SK83 (第33・69・70図)

<概要>

西区西側で検出した長径0.6m、短径0.4m、深さ0.05mを測る梢円形土坑である。

<出土遺物>土師器:43

43は杯である。器壁は厚く口縁端部はやや外反気味にのびる。

溝

SD12 (第33・71・72図)

<概要>

西区中央を南北に縱断する溝である。検出長11.0m、幅0.25m、深さ0.15mを測る。南北は調査区外へと伸びる。古代の耕作に伴う溝だと考える。SB600より古い。奈良～平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:44

44は鉢の口縁部である。口縁部は肥厚気味で端部は上方に尖る。8世紀後半～9世紀初頭か。

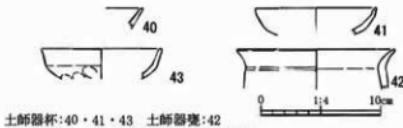
SD167 (第33・71・72図)

<概要>東区中央の南北の溝である。検出長10.0m、幅0.35m、深さ0.10mを測る。古代の耕作に伴う溝だと考える。飛鳥・平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:45・46、須恵器:47・48

45は杯である。器壁は薄く口縁端部は内面に折り返す。46は皿である。体部から口縁部にかけて厚くなり口縁端部は内面上方に摘まみ上げる。8世紀後半～9世紀初頭のものと考える。

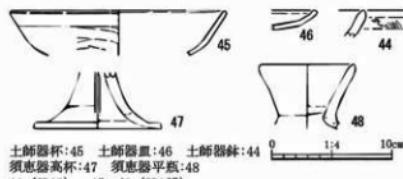
47は高杯の脚部である。おそらく上下2段の透かしを2か所に施す。48は平瓶の注ぎ口部である。口縁端部は外反気味に尖る。7世紀代のものと考える。



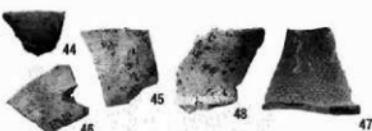
第69図 2面目土坑出土遺物実測図



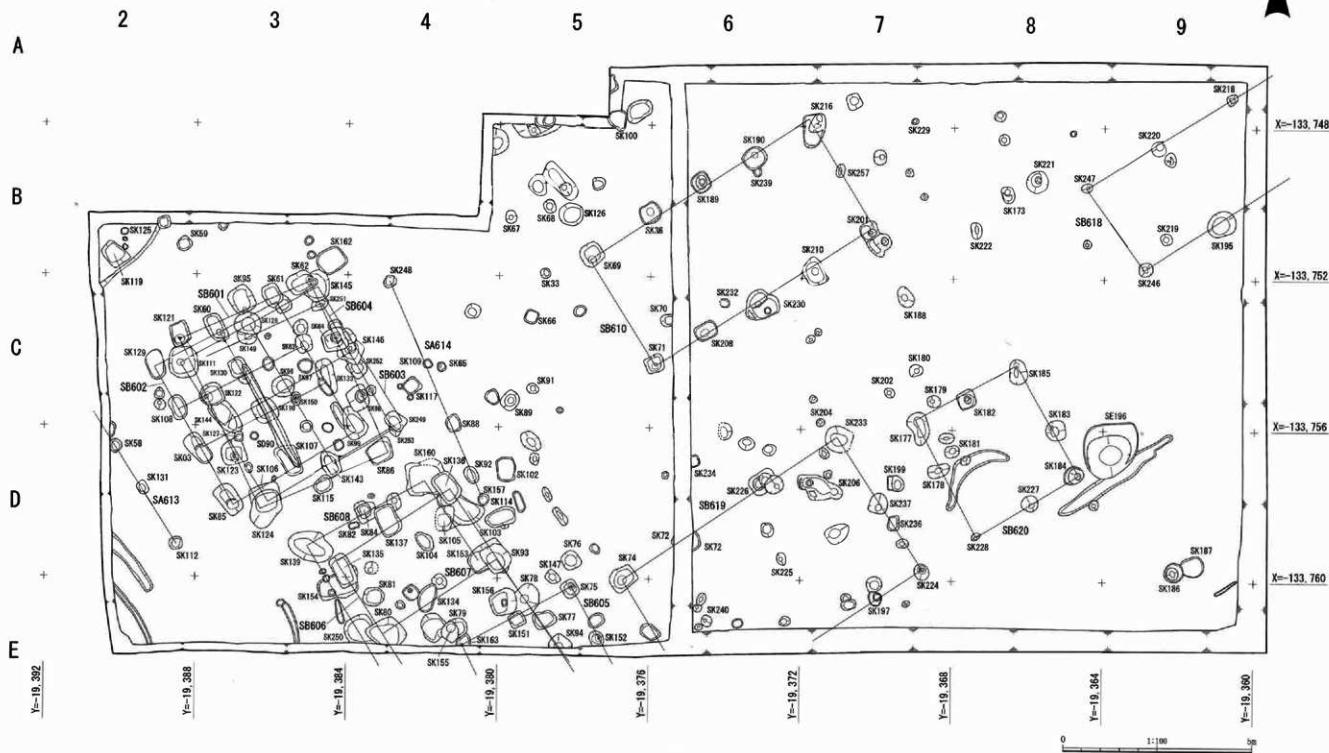
第70図 2面目土坑出土遺物



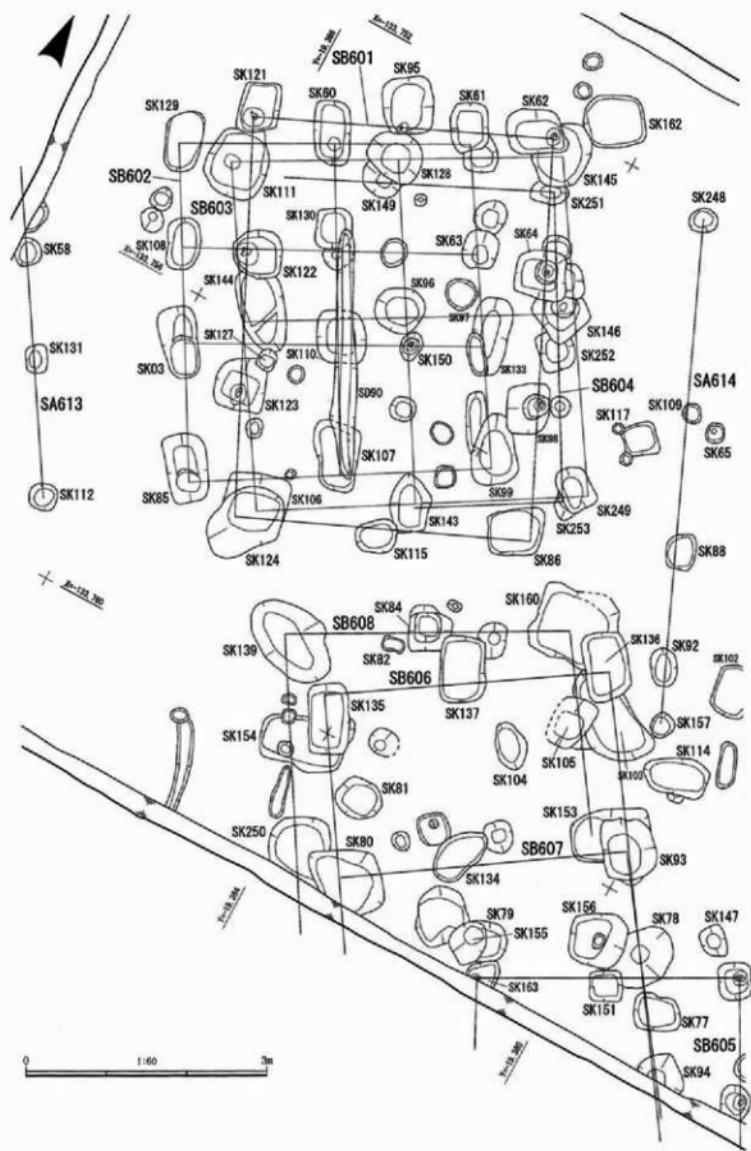
第71図 2面目溝出土遺物実測図



第72図 2面目溝出土遺物



第73図 3面目構造配置図



第74図 3面目主要部拡大図

③ 3面目

掘立柱建物跡

SB601 (第74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87図)

<概要>

西区中央付近で検出した 3間×2間の南北棟側柱建物である。SK62・64・86・95・98・115・121・122・123・124からなる。桁行長は5.0m、梁行長は3.8mを測る。建物の主軸方位はN25°Wで、大きく西に傾く。掘方径は0.5～0.8m、深さは0.2～0.6mを測り、平面形は方形のものと不成形のものがある。桁行掘方間は約1.7m、梁行掘方間は1.9mを測る。SK150は建物のほぼ中央に位置しており、掘方と同様の柱材が残存していたことから、SB601の東柱跡の可能性がある。掘方内からは飛鳥～平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:49～60、須恵器:61～65、柱根:66～72

49～51は杯である。49・50の口縁端部は外反気味にのびる。52は皿である。器壁は厚く口縁端部はやや外反気味にのびる。53～55は甕である。53の口縁部はやや垂直気味にのびる。54は口縁部が「く」の字状に緩やかに外反する。55は口縁端部を摘まみ上げる。56・57は甕の把手である。58は羽釜で鉗端部を上方に摘まみ上げる。59・60は高杯の脚部だが、詳細は不明。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

61は杯身である。口縁部は内側上方にのびる。62は高台を付さない杯で底部は湾曲する。63は鉢で端部は丸みを帯びる。64は杯蓋である。65は杯B蓋で端部を下方に摘まんで嘴状に突出させ天井部を平坦に仕上げる。7世紀後半～9世紀前半のものと考える。

66～72は芯持材を用いた柱根である。66・70・71・72の断面形は円形を呈する。底面形態は、角を斜めに面取りし側面形はほぼ方形である。67・68・69は腐敗が進み正確な面取りの単位が確認できないため形状は不明である。

SB602 (第74・88・89・90・91・92図)

<概要>

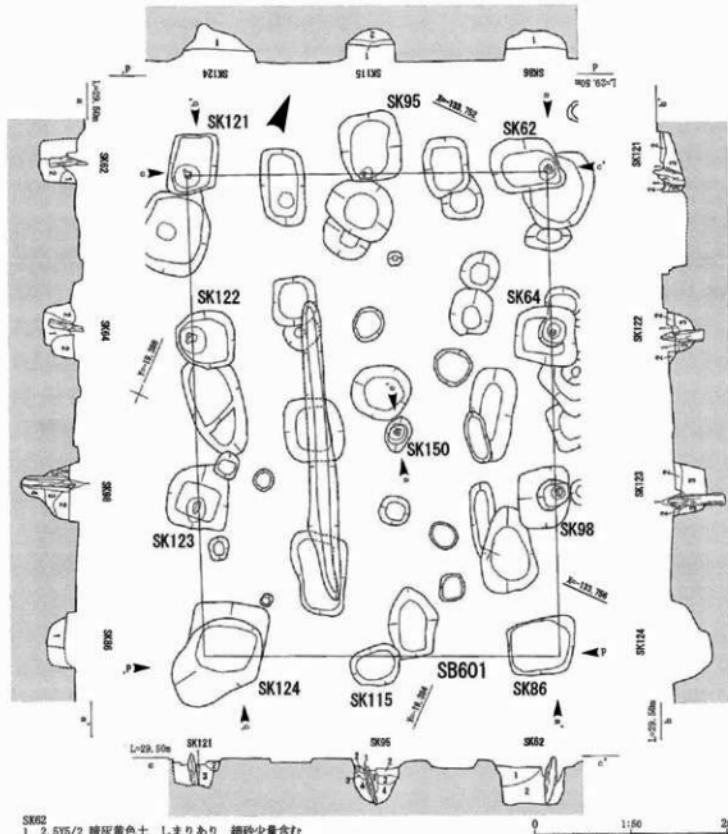
西区中央付近で検出した 3間×2間の南北棟総柱建物である。SK03・60・61・63・85・99・107・108・110・129・130・133からなる。桁行長は4.2m、梁行長は3.7mを測る。建物の主軸方位はN30°Wで、大きく西に傾く。SB601より古い。掘方径は平面形が方形を呈するものが0.5～0.6m、平面形が長方形を呈するものは長軸長0.6～0.9m、深さは0.2～0.45mを測る。掘方平面形は長方形のものが多く、掘方内の土層が単層・水平堆積がほとんどであったことは、柱材の抜き取りが行われたためと考える。桁行掘方間は1.4m、梁行掘方間は1.75～2.0mを測る。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:73～77、須恵器:78～80

73は杯である。口縁端部を摘まみ上げる。74・75は鉢である。74は口縁端部がやや尖る。

75は口縁端部がやや垂直気味にのびる。76は甕口縁部である。外上方に立ち上がる。

77は甕把手で端部はやや上方に摘まみ上げる。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。



- SK62**
2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂少量含む
炭化物 ϕ 1cm多く含む ベース土ブロック状多く含む
 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm少々含む
- SK64**
- SY5/1 黄色粘質土 細砂多く含む 炭化物 ϕ 1cm少々含む
 2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm少々含む ベース土ブロック状全体に含む
- SK68**
- SY5/1 黄色粘質土 細砂少々含む 炭化物 ϕ 1cm少々含む
 2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm少々含む
 3. 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂少々含む
炭化物 ϕ 1cm少々含む
 4. 2. SY6/1 黄灰色砂質土 しまりあり
- SK121**
- SY5/1 黄色粘質土 細砂少々含む 炭化物 ϕ 1cm少々含む
 2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂少々含む
ベース土ブロック状全体に含む
 3. 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂少々含む
炭化物 ϕ 1cm以下少々含む
ベース土ブロック状全体に含む
- SK123**
- SY5/1 黄色粘質土 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm以下多く含む ベース土ブロック状少々含む
 2. SY5/2 黄灰色粘質土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む
炭化物 ϕ 1cm以下少々含む
 3. 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂含む 炭化物 ϕ 1cm以下少々含む
- SK124**
1. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm多く含む ベース土ブロック状全体に含む
 - SK115
 2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂多く含む
炭化物 ϕ 1cm少々含む
 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂少々含む
炭化物 ϕ 1cm含む

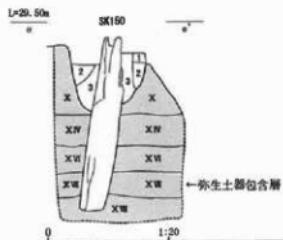
SK126

 - SY5/1 黄色粘質土 細砂少々含む 炭化物 ϕ 1cm少々含む
 2. SY5/2 噴灰黄色土 しまりあり 細砂少々含む
炭化物 ϕ 1cm含む
 3. 2. SY5/1 黄灰色粘質土 細砂少々含む
炭化物 ϕ 1cm含む
 4. 2. SY6/1 黄灰色砂質土 しまりあり
黄灰色粘土ブロック状少々含む

第75図 SB601平・断面図



第76図 SB601-SK150断ち割り（北東から）



- 1 10YR5/1 暗灰色土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む
 2 2.5Y6/1 黄灰色土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む
 3 2.5Y4/1 灰色粘質土 やわらかい 細砂少く含む
 X 2.5Y7/3 淡黄色土 しまりあり 細砂多く含む
 XIV 2.5Y7/1 灰白色粘質土 しまりあり 細砂多く含む
 XVI 5Y5/1 灰色粘質土 やわらかい 細砂少く含む
 XVII 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やわらかい 細砂少く含む
 XVIII 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 砂利多く含む

第77図 SB601-SK150断面図



第78図 SB601-SK64土層（南西から）



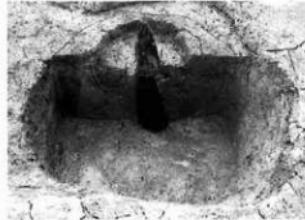
第79図 SB601-SK62土層（南東から）



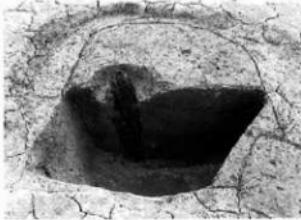
第80図 SB601-SK98土層（南西から）



第81図 SB601-SK121土層（北東から）



第82図 SB601-SK122土層（北東から）



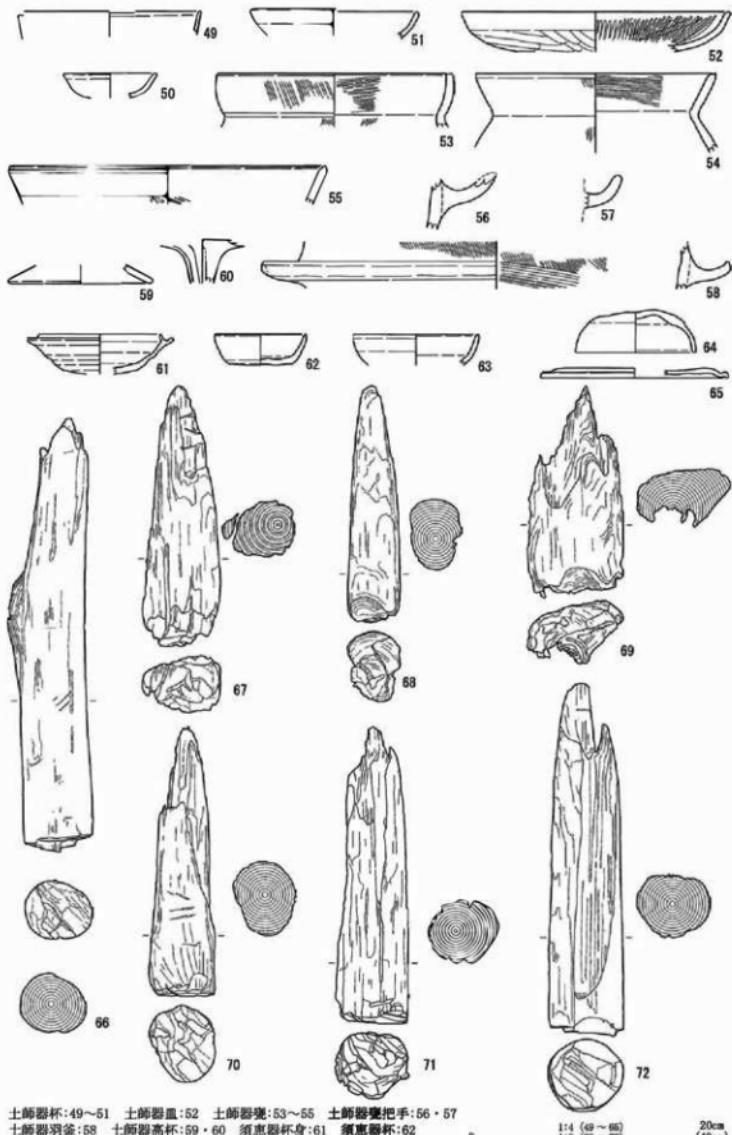
第83図 SB601-SK123土層（北東から）



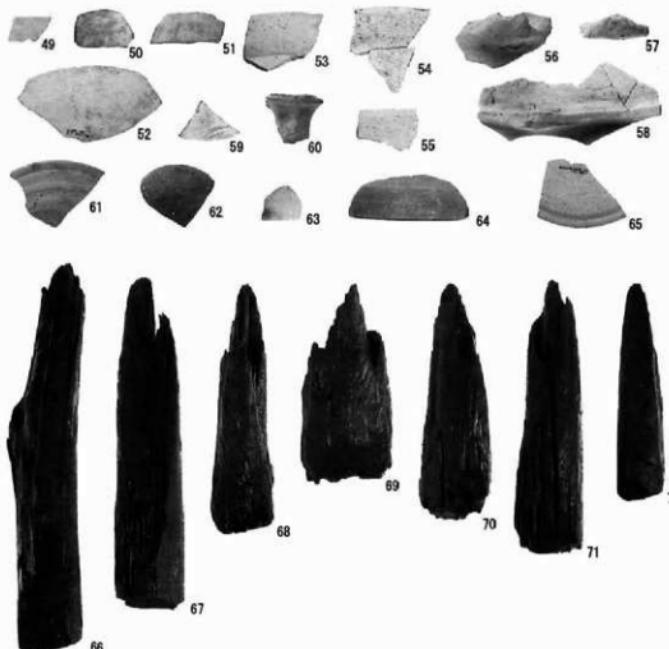
第84図 SB601掘方半截状況（北西から）



第85図 SB601完掘状況（北西から）

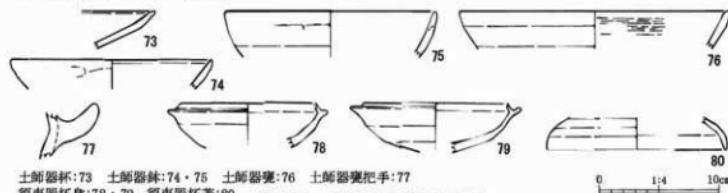


第86図 SB601出土遺物実測図



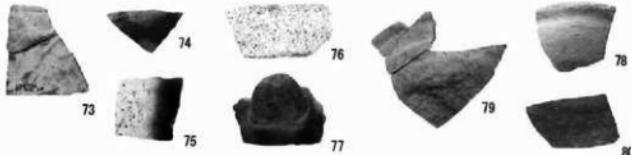
第87図 SB601出土遺物

78・79は杯身で、立ち上がりが内上方を向く。80は杯蓋である。口縁部は下方を向く。
7世紀後半のものと考える。

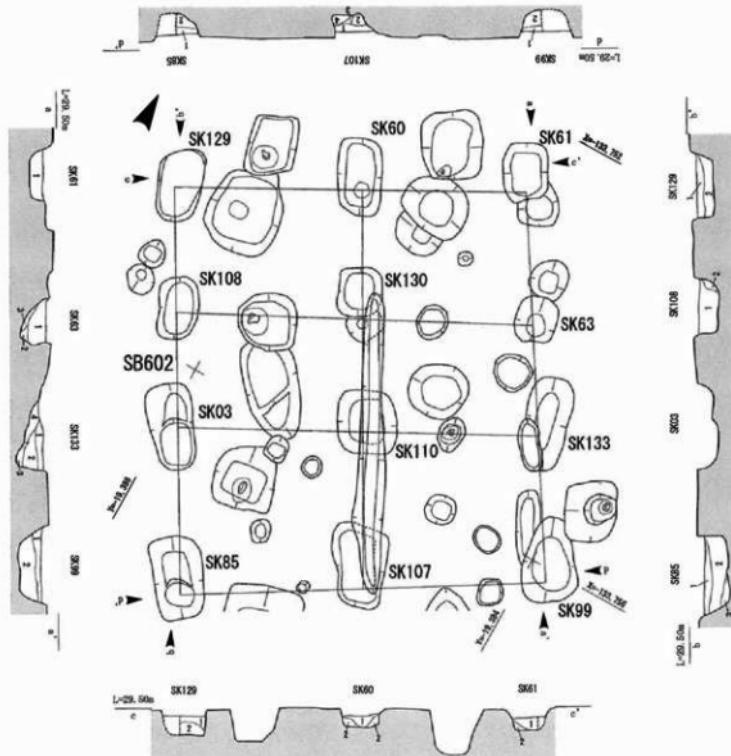


土師器杯:73 土師器鉢:74・75 土師器甕:76 土師器器把手:77
須恵器杯身:78・79 須恵器杯蓋:80

第88図 SB602出土遺物実測図



第89図 SB602出土遺物



SK61	1. 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりあり 細砂多く含む ベース土ブロック状全体に含む	SK108	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 壕化物 $\phi 1cm$ 少量化む 細砂少量化む ベース土ブロック状全体に含む
2. 2.5Y4/1 黄灰色土 1よりベース土ブロック少ない		2. 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりあり 細砂多く含む	
SK63	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 壕化物 $\phi 1cm$ 少量化む ベース土ブロック状全体に含む	SK129	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 細砂多く含む 2. 2.5Y4/1 黄灰色土 やわらかい 細砂少量化む ベース土ブロック状少量化む
2. 2.5Y4/1 黄灰色土 3. 2.5Y6/3 に似る黄色土 しまりあり 細砂多く含む		SK60	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 細砂多く含む 2. 2.5Y4/1 黄灰色土 やわらかい ベース土ブロック状全体に含む
SK133	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 壕化物 $\phi 0.5cm$ 少量化 ベース土ブロック状全体に含む	SK61	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む 2. 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりあり 細砂少量化む 3. 2.5Y4/1 黄灰色土 2より少しやわらかい 4. 2.5Y4/1 黄灰色土 2より少しやわらかい 細砂多く含む
2. 10YR4/1 暗灰色土 やわらかい ベース土ブロック状全体に含む		SK107	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む 2. 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりあり 細砂少量化む 3. 2.5Y4/1 黄灰色土 2より少しやわらかい 4. 2.5Y4/1 黄灰色土 2より少しやわらかい 細砂多く含む
3. 2.5Y4/3 に似る黄色土 しまりあり 細砂多く含む			
SK99	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり 細砂多く含む ベース土ブロック状全体に含む		
2. 2.5Y4/1 黄灰色土 やわらかい 細砂多く含む			
SK85	1. 10YRS/1 暗灰色土 しまりあり ベース土ブロック状全体に含む 2. 10YR4/1 暗灰色土 やわらかい ベース土ブロック状全体に含む		
3. 2.5Y4/1 黄灰色土質土 やわらかい 細砂多く含む			

第90図 SB602平・断面図



第91図 SB602掘方半裁状況（北西から）



第92図 SB602完掘状況（北西から）

SB603 (第74・93・94・95・96・97・98・99図)

<概要>

西区中央付近で検出した2間×2間の南北棟総柱建物である。SK96・106・111・128・143・144・145・146・249からなる。桁行長は4.3m、梁行長は4.1mを測る。建物の主軸方位はN32°Wで、大きく西に傾く。SB602より古い。掘方径は平面形が方形を呈するものが0.6～0.85m、長方形を呈するものが長軸長0.6～0.75m、深さ0.25～0.6mを測る。SB602同様、平面形が長方形を呈し、土層が水平堆積している掘方は柱材が抜き取られたものと考える。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

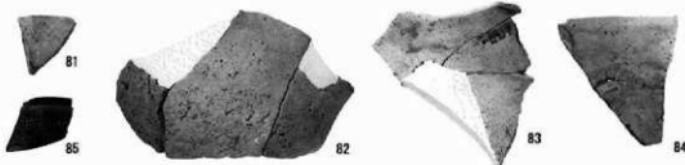
<出土遺物> 土師器:81～84、須恵器:85

81・82は鉢である。81は端部がやや尖る。82は器壁が厚く椀型を呈する。83は甕である。体部から口縁部にかけて「く」の字状に緩やかに外反する。84はコシキである。口縁端部を摘み上げる。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

85は杯身で、立ち上がりが内上方に向く。7世紀後半のものと考える。



第93図 SB603出土遺物実測図



第94図 SB603出土遺物

SB604 (第74・100図)

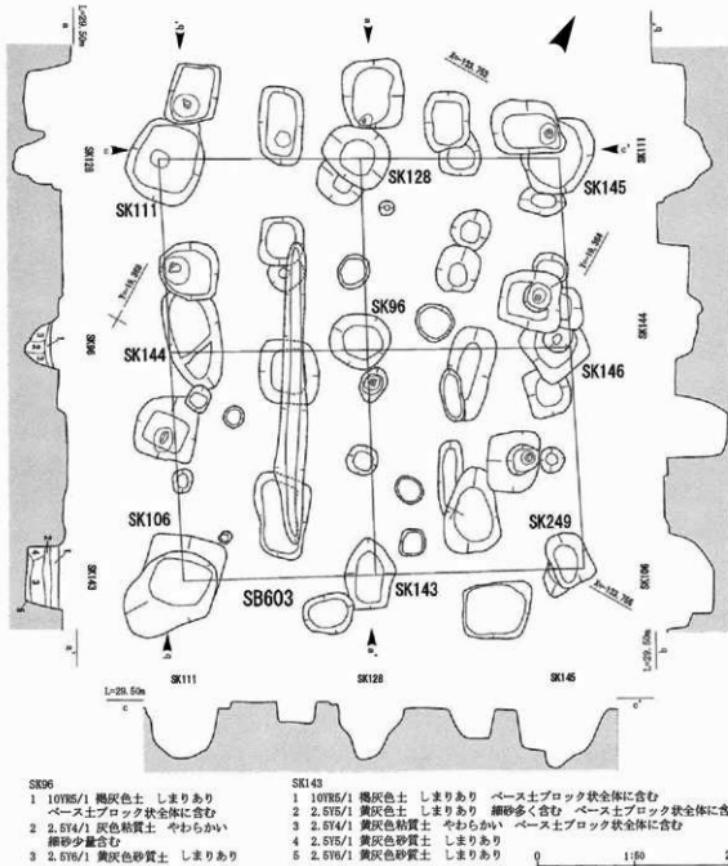
<概要>

西区中央で検出した2間×2間以上の建物である。SK149・251・252を伴うと考えられるが、SB601・602・603に切られており正確な建物規模は不明である。建物の主軸方位はN30°Wを測り、大きく西に傾く。

SB605 (第74・101・102・103・104・105・106図)

<概要>

西区南側で検出した2間×1間以上の南北棟側柱建物である。SK75・151・152・163を



第95図 SB603平・断面図



第96図 SB603-SK96土層（南西から）



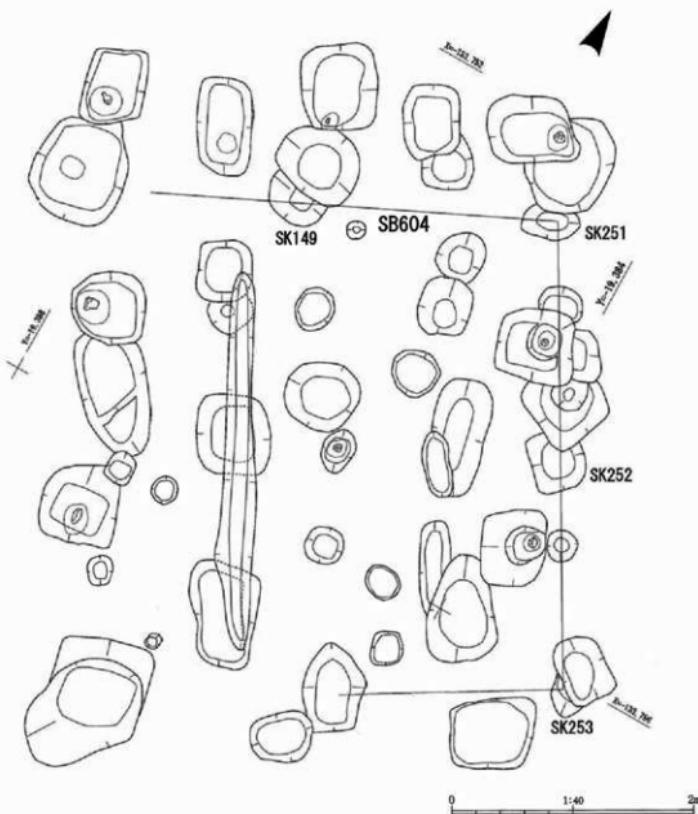
第97図 SB603-SK143土層（南西から）



第98図 SB603完掘状況（南西から）



第99図 SB603完掘状況（北西から）



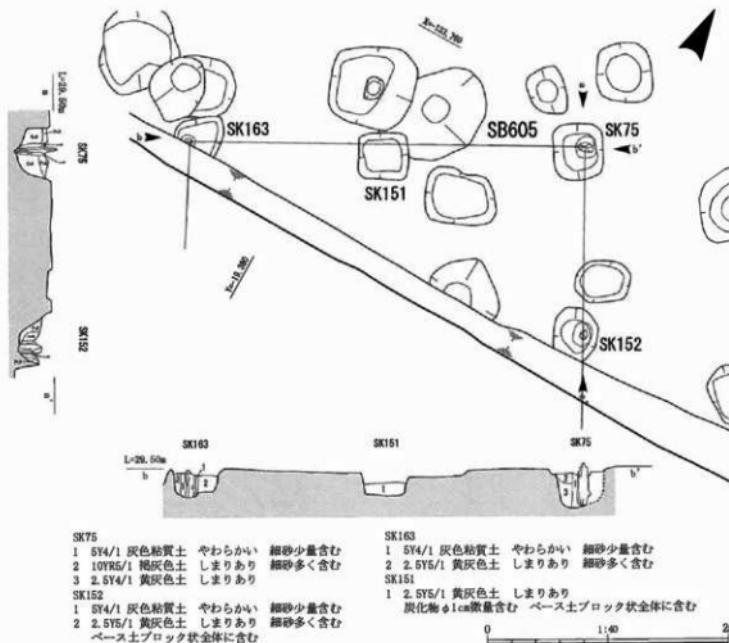
第100図 SB604平面図

伴うが、調査区外へ延びるため正確な建物規模は不明である。桁行長は1.7m以上、梁行長3.3mを測る。建物の主軸方位はN28°Wで、大きく西に傾く。掘方径は0.32～0.4m、深さは0.2～0.36m、深さ0.16～0.36mを測り、平面形は円形と方形のものがある。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:86、柱根:87～89

86は杯である。口縁端部は外反し僅かに尖る。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

87～89は芯持材を用いた柱根である。腐敗が進み正確な面取りの単位が確認できないため断面形は不明。88の底面形態は角を斜めに面取りし、側面形はやや斜めに尖る。



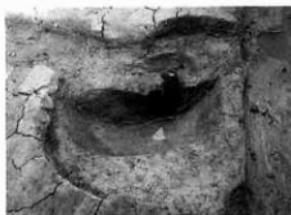
第101図 SB605平・断面図



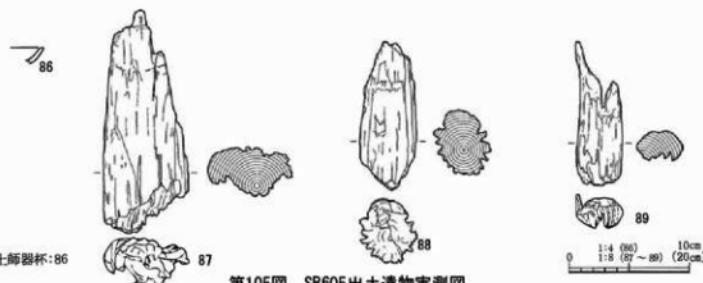
第102図 SB605-SK75土層（南西から）



第104図 SB605柱列確認状況（南東から）



第193図 SB605-SK152土層（南西から）



第105図 SB605出土遺物実測図

SB606 (第74・107・108・109・110・111図)

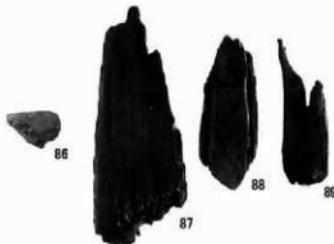
<概要>

西区南側で検出した3間以上×2間の南北棟側柱建物である。SK77・80・93・135・136・137を伴うが、調査区外側へ延びるため正確な建物規模は不明である。桁行長は4.2m以上、梁行長は3.6mを測る。建物の主軸方位はN33°Wで、大きく西に傾く。掘方径は平面形が方形を呈するものが0.5～0.75m、長方形を呈するものが長軸長0.85～0.9m、深さ0.2～0.45mを測る。SK80は、検出位置からSB606の柱列を成し得るが、土坑の長軸方向が建物の主軸方向に比べ西側にずれており、掘方よりも新しい土坑とも考えられる。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物>土師器:90・91、須恵器:92～94

90は小型の甕である。口縁端部を摘まみ上げる。91は甕把手である。貼付部はやや肉厚。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

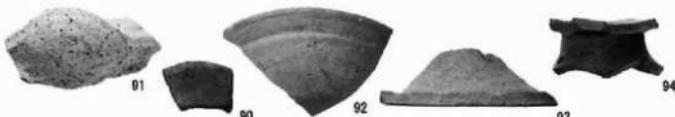
92は杯身である。やや小径で、立ち上がりは短くなると考えられる。93・94は高杯である。93は脚部で端部は下方に摘まんで突出させる。94は脚部で円形の透かし孔を3か所施す。7世紀後半のものと考える。



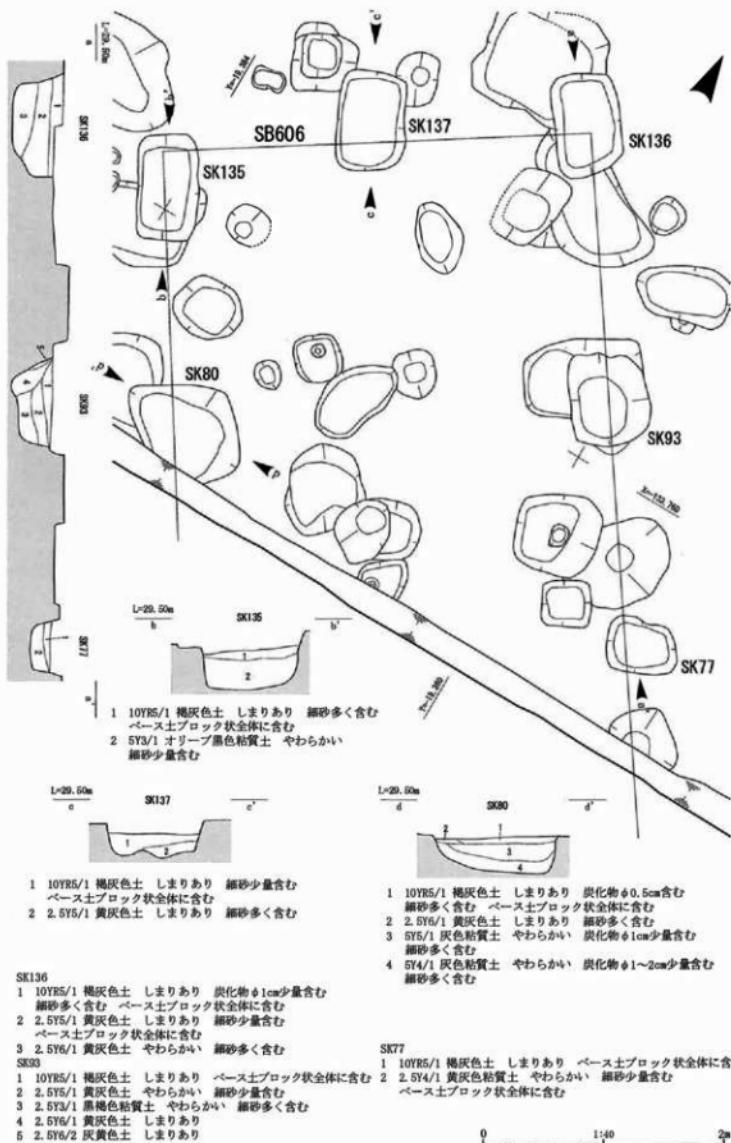
第106図 SB605出土遺物



第107図 SB606出土遺物実測図



第108図 SB606出土遺物



第109図 SB606平・断面図



第110図 SB606掘方半裁状況（北西から）



第111図 SB606完掘状況（北西から）

SB607 (第74・112・113・114図)

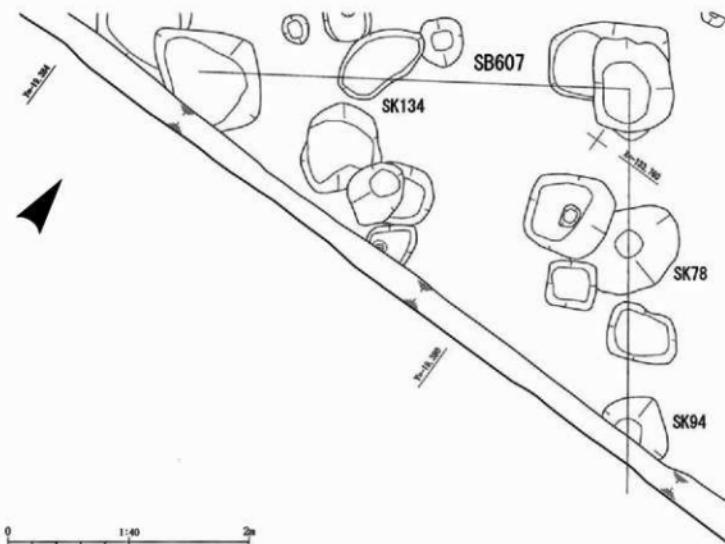
<概要>

西区南側で検出した2間以上×1間の棟側柱建物である。SK78・94・134を伴うと考えられるが、SB605・606に切られており正確な建物規模は不明である。建物の主軸方位はN33°Wで、大きく西に傾く。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

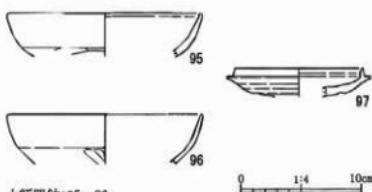
<出土遺物> 土師器:95・96、須恵器:97

95・96は鉢である。95は器壁が厚く口縁端部を摘み上げる。96は器壁が薄く口縁端部を丸く仕上げる。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

97は杯身で、立ち上がりが内面上方を向く。7世紀後半のものと考える。



第112図 SB607平面図



土師器鉢:95・96
須恵器杯身:97

第113図 SB607出土遺物実測図

第114図 SB607出土遺物

SB608 (第74・115・116・119・120・121図)

<概要>

西区南側で検出した2間以上×2間の南北棟側柱建物である。SK84・139・153・160・250を伴うと考えられるが、SB605・606・607に切られており正確な建物規模は不明である。建物の主軸方位はN33°Wで、大きく西に傾く。掘方径は平面形が方形を呈するものが0.75～1.0m、長方形を呈するものが長軸1.1m、深さ0.3～0.7mを測り、検出した建物跡の中で一番大型のものである。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器鉢:98、須恵器高杯:99

98は鉢である。器壁は薄く口縁端部を摘まみ上げる。7世紀後半～8世紀初頭のものと考える。

99は高杯の脚部であるが正確な形状は不明。7世紀後半～8世紀初頭のものと考える。

SB610 (第117・118・122・123・124・125・126図)

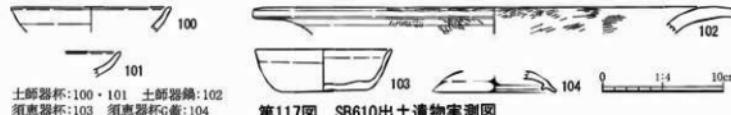
<概要>

西区から東区にかけて調査区中央北側で検出した4間×2間の東西棟側柱建物である。SK36・69・71・189・190・201・208・210・216・230・257からなる。桁行長は6.8m、梁行長は3.3mを測り、建物の主軸方位はN32°Wで、大きく西に傾く。掘方径は0.45～0.75m、深さ0.12～0.35mを測り、平面形は方形と不成形のものがある。桁行掘方間は1.6～1.75mを測る。掘方内からは飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:100～102、須恵器:103・104

100・101は杯である。口縁端部は外反気味にのびる。102は鍋の口縁部である。内外面にハケ目を施す。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

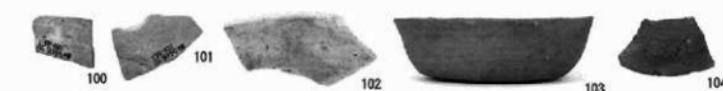
103は高台を付さない杯である。SK189の柱穴から出土した。厚い底部をもつ。104は口縁内面にかえりを有す杯G蓋である。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。



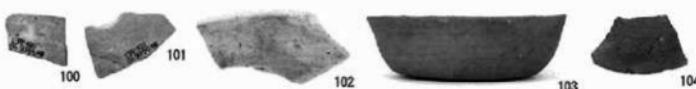
第115図 SB608出土遺物実測図



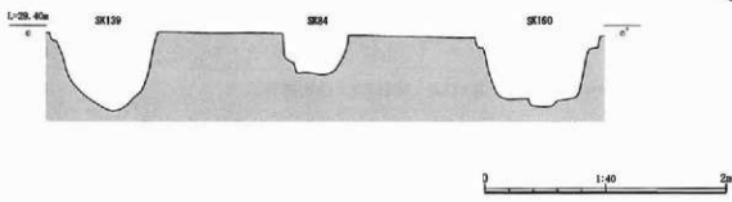
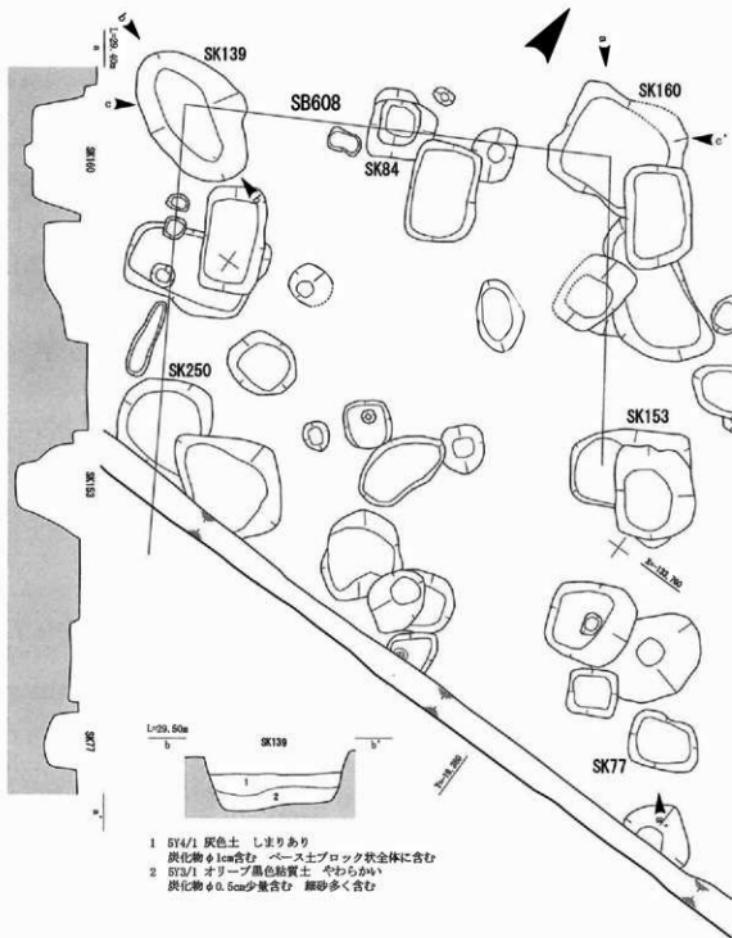
第116図 SB608出土遺物



第117図 SB610出土遺物実測図



第118図 SB610出土遺物



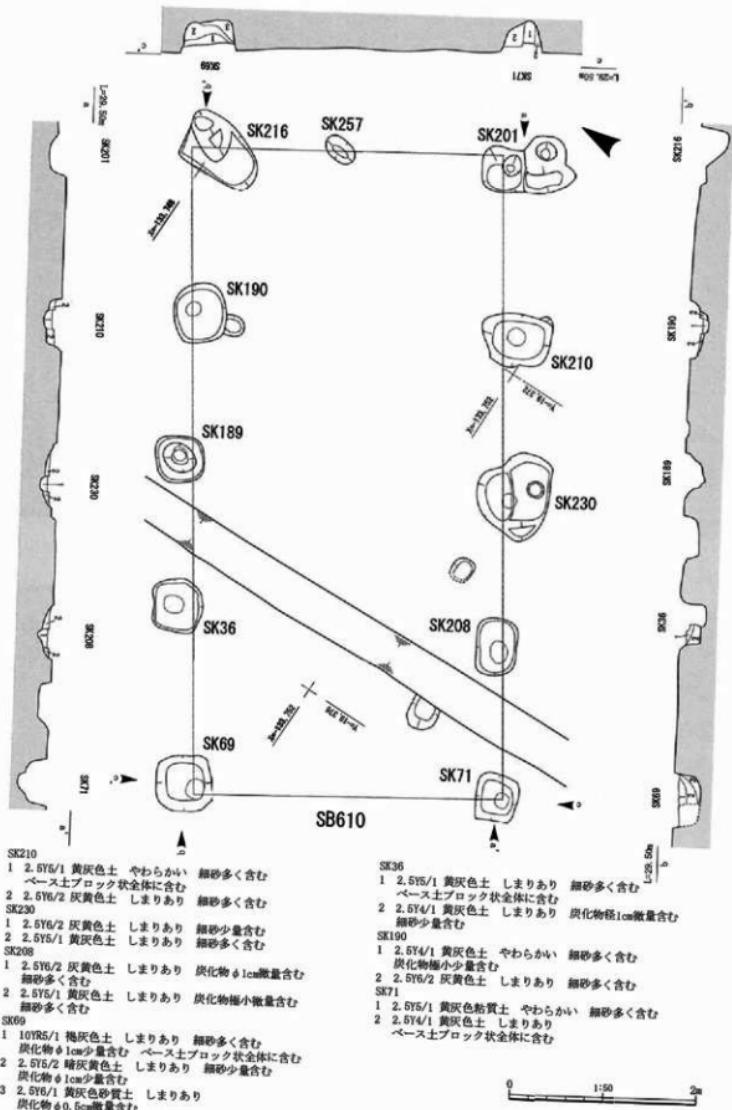
第119図 SB608平・断面図



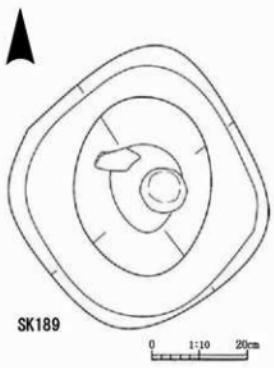
第120図 SB608完掘状況（南西から）



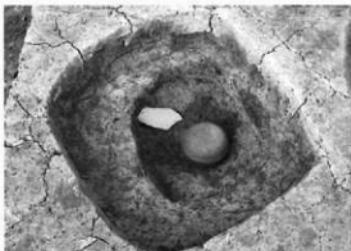
第121図 SB608完掘状況（北西から）



第122図 SB610平・断面図



第123図 SB610-SK189遺物出土図



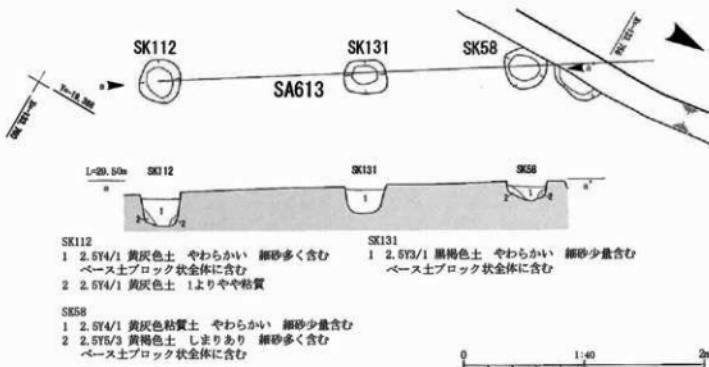
第124図 SB610-SK189遺物出土状況（南から）



第125図 SB610-SK210土層（北西から）



第126図 SB610完掘状況（南西から）



第127図 SA613平・断面図

SA613 (第127・128・129・130図)

<概要>

西区西侧で検出した2間以上の柱列である。調査区外へ延びるため正確な規模は不明であるが、検出長で3.0mを測る。SK58・112・131からなり、掘方間の距離は1.3m・1.7mで不揃いである。主軸方位はN32°Wで、SB601などの建物に伴う塀の可能性がある。掘方径は0.32～0.36m、深さ0.16～0.28mを測る。掘方内からは奈良～平安時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:105・106

105は杯である。体部から口縁部にかけて外反気味に伸び、口縁端部は細見を帯びる。106は碗である。口縁端部は直線気味に尖る。8世紀後半～9世紀初頭のものと考える。

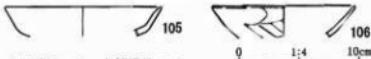
SA614 (第73図)

<概要>

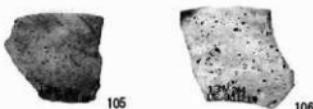
西区中央で検出した3間の柱列である。SK88・109・157・248からなり、全長6.3mを測る。掘方間の距離は1.8m・2.1m・2.4mで不揃いである。主軸方位はN23°Wを測る。掘方径は0.18～0.42m、深さ0.3mを測り、奈良～平安時代の遺物が出土している。



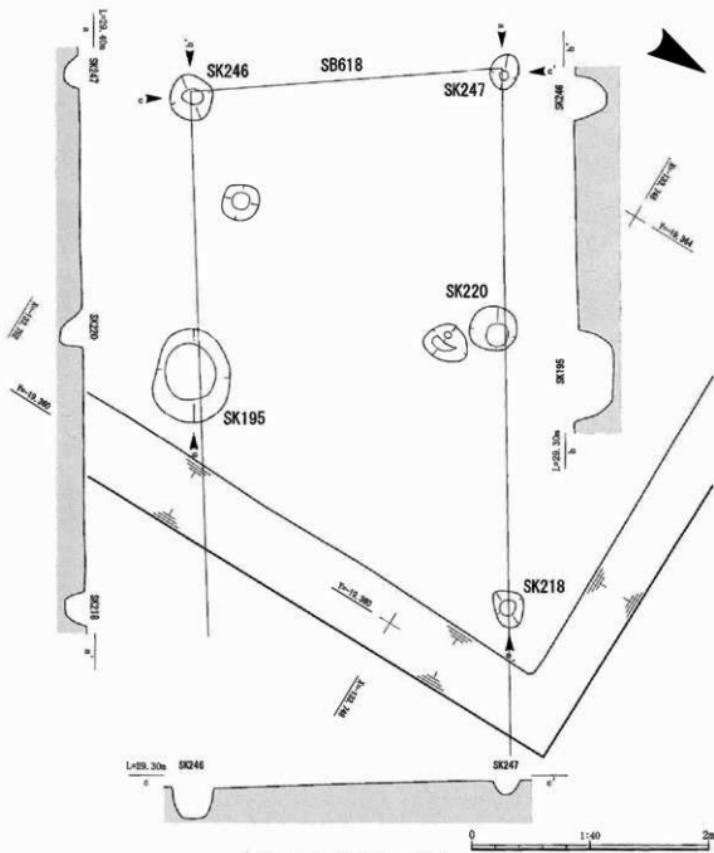
第128図 SA613完掘状況(北西から)



第129図 SA613出土遺物実測図



第130図 SA613出土遺物



第131図 SB618平・断面図

SB618 (第131図)

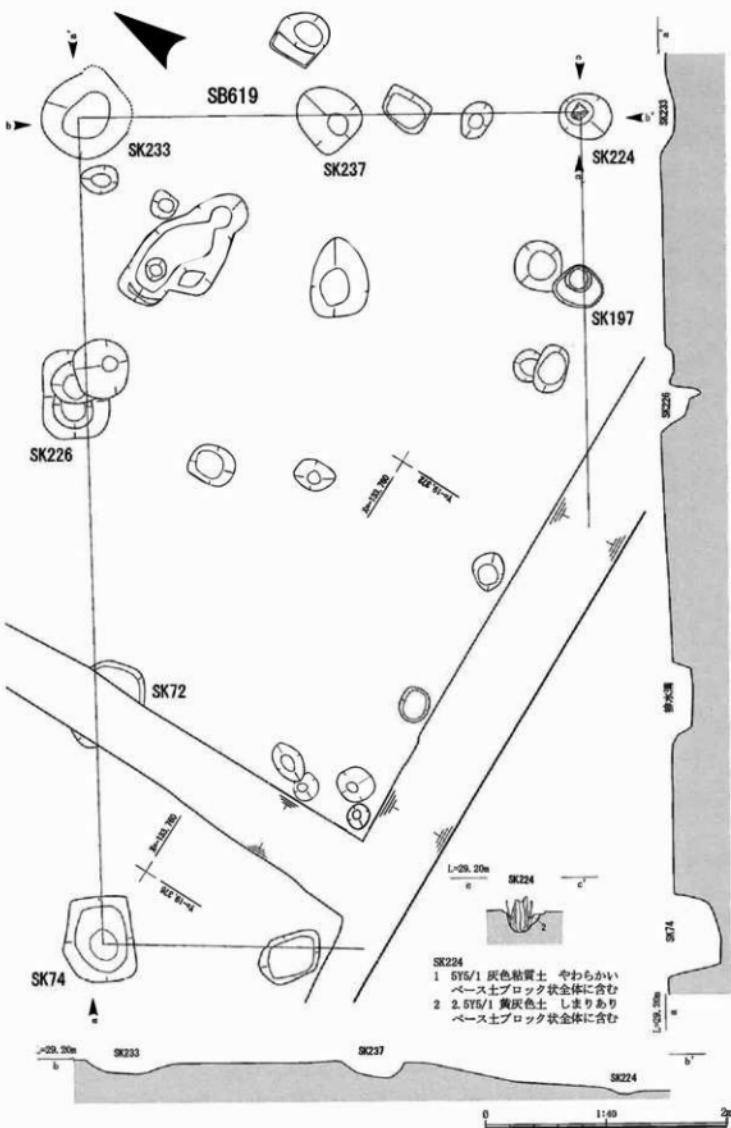
<概要>

東区北東で検出した2間以上×1間の東西棟側柱建物である。SK195・218・220・246・247を伴うが、調査区外へ延びるため正確な建物規模は不明である。桁行長は4.5m以上、梁行長は2.6mを測る。建物の主軸方位はN32°Wで、大きく西に傾く。掘方径は0.3～0.7m、深さ0.12～0.32mを測り、平面形は円形を呈する。桁行掘方間2.25m、梁行掘方間2.8mを測る。掘方内からは奈良時代とみられる遺物が出土している。

SB619 (第132・133・134図)

<概要>

調査区中央南側で検出した3間×2間の東西棟側柱建物である。SK72・74・197・224・



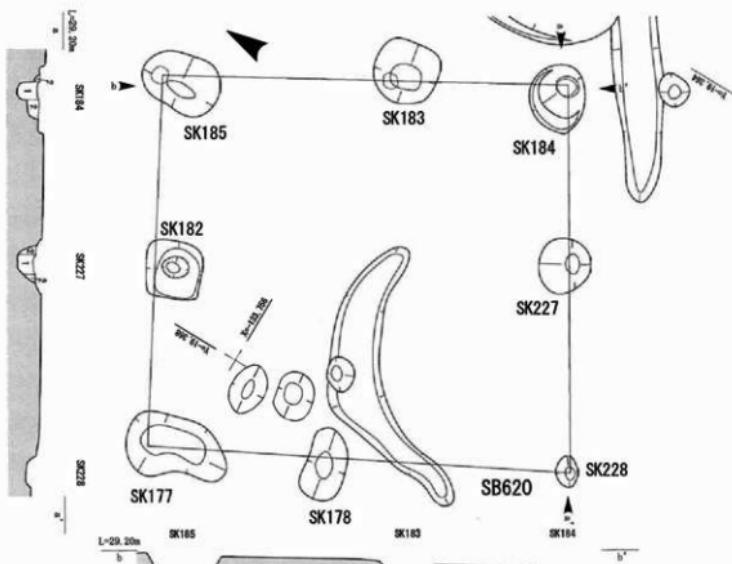
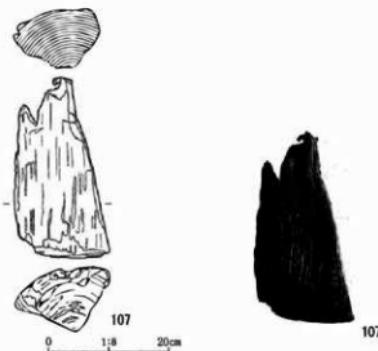
第132図 SB619平・断面図

226・233・237を伴うが、調査区外へ延びるため正確な建物規模は不明である。桁行長は6.8m、梁行長は4.2mを測る。建物の主軸方位はN32°Wで、大きく西に傾く。

掘方径は0.4～0.68m、深さ0.32～0.36mを測り、平面形は円形を呈する。桁行掘方間1.4～2.4m、梁行掘方間2.1mを測る。掘方内からは飛鳥～奈良時代とみられる遺物が出土している。

<出土遺物>柱根:107
107は芯持材を用いた柱根である。

腐敗が進み正確な面取りの単位が 第133図 SB619出土遺物実測図 第134図 SB619出土遺物



- SK184
1 2.575/1 黄灰色土 やわらかい 腐化物少1cm微量含む
ベース土ブロック状全体に含む
2 2.574/1 黄灰色土 しまりあり
細砂多く含む 腐化物少0.5cm多く含む
ベース土ブロック状全体に含む

- SK227
1 2.575/1 黄灰色土 やわらかい 腐化物極少微量含む
ベース土ブロック状全体に含む
2 2.574/1 黄灰色土 しまりあり
腐化物極少微量含む ベース土ブロック状全体に含む

第135図 SB620平・断面図

確認できないため断面形は不明。底面形態は角を斜めに面取りし底面を平らに加工してあると思われる。

SB620 (第135・136・137図)

<概要>

東区中央南側で検出した2間×2間の側柱建物である。SK177・178・182・183・184・185・227・228からなる。桁行長は3.4m、梁行長は3.1mを測る。建物の主軸方位はN30°Wで、大きく西に傾く。掘方径は0.12～0.52m、深さ0.1～0.28mを測り、平面形は円形と方形のものがある。桁行掘方間は1.4m・2.0mで不揃いで、梁行掘方間は1.5m・1.6mである。掘方内からは奈良時代の遺物が出土している。

<出土遺物> 土師器:108・109、須恵器:110

108・109は鉢である。108は口縁端部がやや内面上方へのびる。109は底部であるが詳細は不明。8世紀のものと考える。

110は蓋を転用した硯である。内外面に墨が付着している。8世紀のものと考える。

井戸

SE196 (第138・139・140・141・142・143図)

<概要>

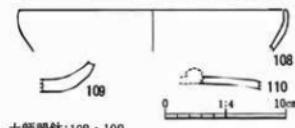
東区南東で検出した平面円形を呈する素掘りの井戸

戸である。径約1.5m、深さ約0.72mを測り、底は弥生土器包含層まで達する。底部がやや湾曲気味であり、矢板などの部材を抜き取った可能性がある。井戸内からは飛鳥～奈良時代初頭にかけての遺物が出土しており、機能時期は8世紀初頭までと考えられる。

<出土遺物> 土師器:111～121、須恵器:122～125

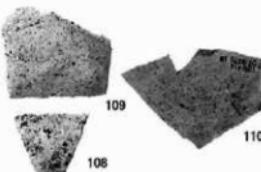
111～115は杯である。111・112は口縁部にかけて薄くなり、口縁端部はやや上方に摘まみ上げる。113は体部から口縁部にかけて肉厚で、口縁端部はやや外反気味に尖る。114・115は器壁が薄く口縁端部はやや外反気味になる。116～119は甕である。116は体部から口縁部にかけて垂直気味にのびる。117は口縁部が薄く外反気味にのびる。118は口縁端部をやや上方に摘まみ上げる。119は口縁部に2か所穿孔が確認できる。120は甕である。やや肉厚である。121は高杯である。体部から底部にかけて摩滅が著しい。7世紀後半～8世紀初頭のものと考える。

122は椀である。口縁端部はやや尖る。123は小径の杯G蓋である。124は口縁内面にかえりを有する杯B蓋である。内外面には自然釉がかかる。125は平瓶の注ぎ口である。外面に2条沈線を施す。内外面ともに自然釉がかかる。7世紀後半～8世紀初頭のものと考える。

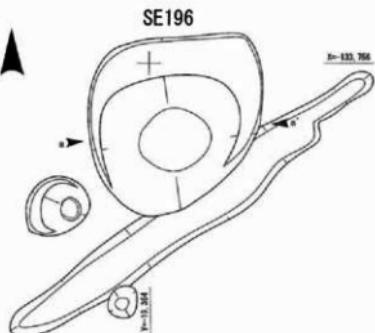


土師器鉢:108・109
須恵器甕(杯B蓋転用):110

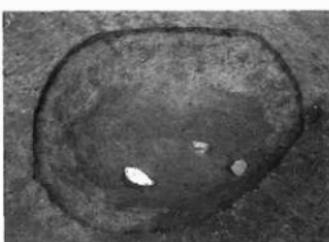
第136図 SB620出土遺物実測図



第137図 SB620出土遺物



第138図 SE196平・断面図



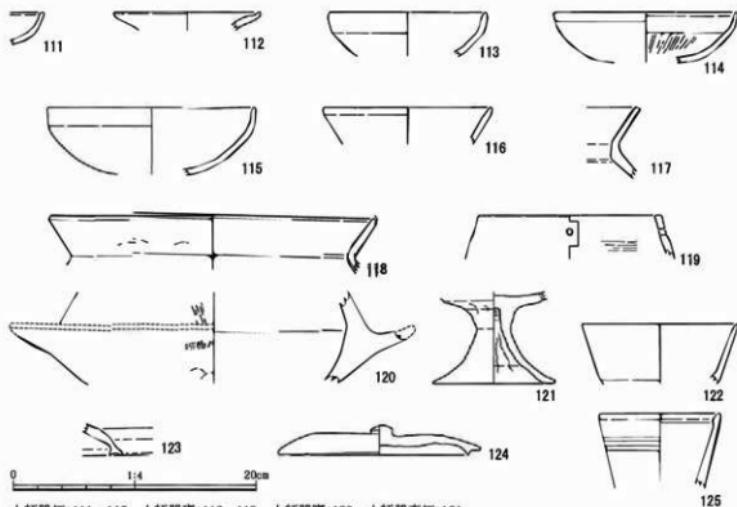
第139図 SE196遺物出土状況（南から）



第140図 SE196土層（南から）

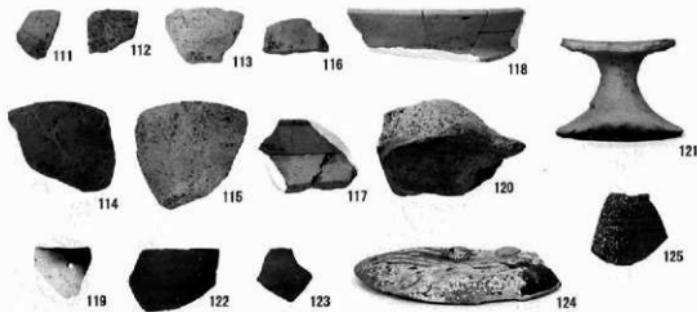


第141図 SE196完掘状況（南から）



土師器杯:111~115 土師器甕:116~119 土師器壺:120 土師器高杯:121
須恵器碗:122 須恵器器口蓋:123 須恵器杯B蓋:124 須恵器平底:125

第142図 SE196出土遺物実測図



第143図 SE196出土遺物

土坑 (※SK101・132は、埋土の特徴から3面目の土坑として処理してきたが、出土遺物の年代検討を続けた結果、本来は2面目に対応する構造だと推定される。)

SK33 (第73・145・146図)

<概要>

西区西側で検出した直径0.2m、深さ0.25mを測る円形土坑である。遺物は奈良～平安時代のものが出土している。

<出土遺物>土師器:126、須恵器:127

126は杯である。体部から口縁部にかけてやや薄くなり口縁端部を擒まみ上げる。

127は貼付高台を有する壺である。高台外側端部が接地する。8世紀末～9世紀初頭か。

SK67 (第73・145・146図)

<概要>

西区東側で検出した直径0.3m、深さ0.3mを測る円形土坑である。

<出土遺物>須恵器:128

128は高台を付さない杯である。器壁は薄く、底面は平坦に仕上げる。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

SK79 (第73・145・146図)

<概要>

西区中央南側で検出した梢円形土坑である。SK155に切られるため正確な規模は不明であるが、深さは0.34mを測る。

<出土遺物>土師器:129

129は杯である。器壁は厚く口縁端部はやや外反気味に尖る。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

SK81 (第73・145・146図)

<概要>

西区中央南側で検出した平面方形を呈する土坑である。長径0.55m、短径0.45m、深さ0.14mを測る。

<出土遺物>土師器:130

130は甕である。口縁部が「く」の字状に緩やかに外反し口縁端部はやや尖る。7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

SK82 (第73・145・146図)

<概要>

西区中央南側で検出した平面方形を呈する土坑である。長径0.25m、短径0.15m、深さ0.2mを測る。

<出土遺物>土師器:131

131は高杯である。脚部のみであるため正確な形状は不明である。8世紀前半のものと考える。

SK101 (第33・145・146図)

<概要>

西区北東隅で検出した梢円形土坑である。SK215に切られるため正確な規模は不明であるが、深さは0.15mを測る。

<出土遺物>黒色土器:132

132は貼付高台を有する碗である。器壁は薄く、高台はやや外側にふんばる。9世紀後

半～10世紀前半のものと考える。

SK119（第144図）

<概要>

西区北西隅で検出した平面方形を呈する土坑である。長径0.72m、短径0.52m、深さ0.44mを測る。断面は逆台形となり、部分的に深くなる。周囲には共に建物跡を構成する掘方が無く、調査区外へSK119を伴う建物跡が続く可能性があるが、土坑の性格は不明である。

SK132（第33・145・146図）

<概要>

西区北東隅で検出した直径0.22m、深さ0.18mを測る円形土坑である。

<出土遺物> 黒色土器:133

133は貼付高台を有する碗である。器壁は薄く、高台は垂直気味に短く立つ。9世紀後半～10世紀前半のものと考える。

SK162（第73・145・146図）

<概要>

西区中央北側で検出した長径0.8m、短径0.65m、深さ0.54mを測る方形土坑である。周囲には共に建物跡を構成する掘方が無く、調査区外へSK162を伴う建物跡が続く可能性があるが、土坑の性格は不明である。

<出土遺物> 土師器:134

134は杯である。器壁は厚く口縁端部はやや尖る。8世紀初頭か。

SK180（第73・145・146図）

<概要>

東区中央で検出した直径0.35m、深さ0.2mを測る円形土坑である。

<出土遺物> 須恵器:135

135は杯である。体部から口縁部にかけて器壁は薄くなり、口縁端部を丸く仕上げる。8世紀後半～9世紀前半のものと考える。

SK181（第73・145・146図）

<概要>

東区中央で検出した長径0.35m、短径0.3m、深さ0.22mを測る梢円形土坑である。

<出土遺物> 須恵器:136

136は杯B蓋である。天井部を押しつぶして平坦に仕上げる。8世紀後半～9世紀初頭



第144図 SK119平・断面図

のものと考える。

SK186 (第73・145・146図)

<概要>

東区南東隅で検出した直径0.5m、深さ0.25mを測る円形土坑である。SK187より新しい。

<出土遺物>須恵器:137・138

137は貼付高台を有する杯である。底部器壁は厚く、高台はやや細く仕上げる。138は円面鏡の外堤部とみられる。8世紀後半～9世紀前半のものと考える。

SK187 (第73・145・146図)

<概要>

東区南東隅で検出した長径0.65m、短径0.55m、深さ0.1mを測る梢円形土坑である。

SK186に切られる。

<出土遺物>土師器:139、須恵器:140

139は碗である。口縁端部は僅かに揃まみ上げる。

140は大径の杯である。底部器壁は薄く、高台は垂直気味に短く立つ。8世紀後半～9世紀前半のものと考える。

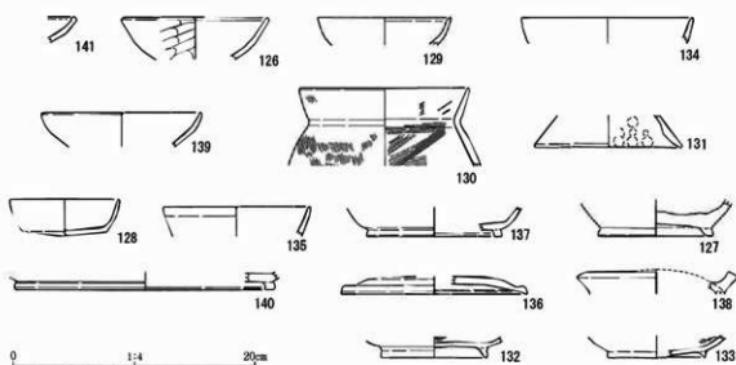
SK188 (第73・145・146図)

<概要>

東区中央で検出した長径0.6m、短径0.4m、深さ0.24mを測る不整形土坑である。

<出土遺物>土師器:141

141は皿である。口縁端部を内面に折り返す。9世紀前半のものと考える。



土師器皿:141 土師器杯:126・129・134 土師器碗:139 土師器高杯:131
須恵器杯:128・135・137・140 須恵器壺:127 須恵器杯8蓋:136 須恵器円面鏡:138 黒色土器碗:132・133
126・127 (SK33) 128 (SK67) 129 (SK79) 130 (SK81) 131 (SK82) 132 (SK101) 133 (SK132)
134 (SK162) 135 (SK180) 136 (SK181) 137・138 (SK186) 139・140 (SK187) 141 (SK188)

第145図 3面目土坑出土遺物実測図



第146図 3面目土坑出土遺物

④ 包含層

<概要>

VI層を上層包含層、VII・VIII・IX層を下層包含層、X・XI層を弥生土器包含層とした。VI層は厚み0.2～0.4m、VII・VIII層は厚み0.15～0.25m、IX層は厚み0.15～0.35m、X・XI層は0.1～0.35mを測る。弥生土器包含層は、特に西区側の遺物量が顕著であった。VI～IX層から出土した遺物は飛鳥～平安時代、弥生土器包含層から出土した遺物は弥生時代前期～中期に相当する。

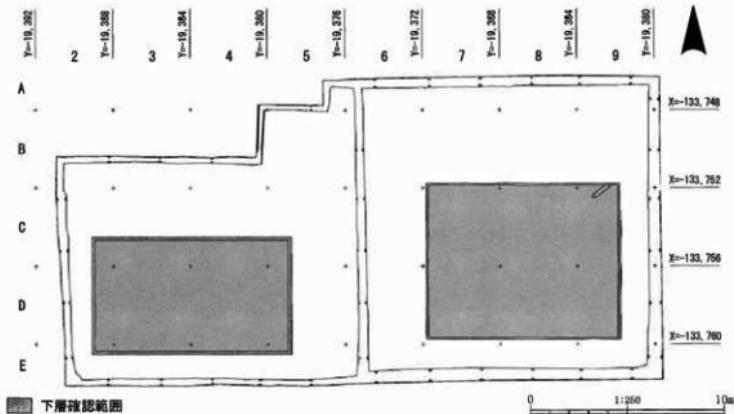
上層・下層（第153～158図）

<出土遺物>土師器:142～176、須恵器:177～215、緑釉陶器:216、灰釉陶器:217～220
製塙土器:221・222、黒色土器:223～228、埴:229、砥石:230

142～148は杯である。142は平坦な底部からなり、高台部はやや外側にふんばる。143は口縁端部を内面上方に摘まみ上げる。144は口縁端部を内面に折り返す。145は口縁部がやや外反気味にのびる。146は体部から口縁部にかけて外反気味にのび、口縁端部は薄く垂直気味に仕上げる。147は体部から口縁部にかけて弯曲しながら外反気味にのび、口縁端部を僅かに摘まみ上げる。148は口縁部にかけて肉厚になり、口縁端部は垂直気味にのびる。149～151は碗である。149は底部が薄く、体部から口縁部にかけて肉厚。口縁端部はやや尖る。150の口縁端部は薄く外反気味にのびる。151は体部がやや外反気味にのび、口縁部にかけて垂直気味にのびる。口縁端部は上方に僅かに摘まみ上げる。152は蓋である。体部から口縁部にかけて薄く仕上げ、口縁端部はやや丸みを帯びる。153～160は甌である。153は全体に厚みがあり、体部から口縁部にかけて外反気味にのびる。154は体部に厚みがあり、口縁端部にかけてやや薄く垂直気味にのびる。体部外面にハケ目あり。155は口縁部が外反気味にの



第147図 包含層掘削風景（南西から）



第148図 下層確認トレンチ配置図

びる。156は口縁端部がやや丸みを帯びる。157は口縁部が外反気味にのび、口縁端部は垂直気味に尖る。158は口縁部に4か所穿孔を施す。159は口縁部がやや外反しながらのびる。160は体部から口縁部にかけて肉厚になり、口縁端部を内面に折り返す。161・162は鉢である。161は体部に厚みがあり、口縁端部にかけてやや薄く仕上げる。162は体部が薄く、口縁部にかけて肉厚になる。口縁端部は外反気味にのび僅かに尖る。163～165は甕の把手部である。163は端部が薄い。164は端部にかけて肉厚となる。165は後から土を足して厚みを補っている。166～170は甕である。166は体部から口縁部にかけて肉厚で口縁端部はやや丸みを帯びる。167は鉢貼付部が肉厚で端部にかけて薄くなる。168は鉢部がやや短い。169は焚口部と考えられる。体部は垂直気味で口縁端部を平坦に仕上げる。170は面取りの加工痕が見受けられる。171～176は高杯である。171・172は胸部で、内面に絞り痕がみられる。172は正確な形状は不明。173は口縁部内面にへこみを持つ。内面には1段斜放射暗文が施される。174は口縁部で口縁端部が垂直気味にのびる。内面に螺旋暗文を施す。軸部面取りは7面確認できる。175は脚部で端部は下方に擴まんで突出させる。176は胸部で、軸部面取りは7面確認できる。6世紀後半～10世紀前半のものと考える。

177・178は杯身である。177は口縁部が内面上方、端部が外反気味にのびる。178は口縁部が薄く内側上方にのびる。179～181は貼付高台を有する杯である。179は平坦な底部から成り、高台部はやや垂直で端部が尖る。180は肉厚で平坦な底部から内湾気味に立ち上



第149図 包含層C 2区遺物出土状況 (南から)

がる。高台部はやや垂直気味に立つ。181の底部は平坦で、高台は垂直気味に立つ。182・183は高台を付さない杯である。平坦な底部からなる。184は盤である。体部から口縁端部にかけて薄く仕上げる。185は椀で口縁部にかけてやや薄く仕上げ口縁端部は丸みを帯びる。体部外面に2条沈線を施す。186～189は杯蓋である。186は口縁端部が外反気味に薄くのびる。187の上部は厚みがあり、口縁端部にかけてやや薄くなる。188・189は体部から口縁端にかけて薄く仕上げる。190・191は高坏の蓋である。190は小径で器壁が厚い。191は摘まみ中央が深くへこむ。192・193は杯B蓋である。肉厚な体部からなる。194・195は鉢である。194はやや器壁が薄く、口縁端部は外反気味にのびる。195は貼付高台を有し器壁が厚い。196～205は壺である。196は子持台付壺の装飾部の可能性がある。体部から口縁部にかけて「く」の字状を呈する。197は肉厚な底部から体部は僅かに垂直気味にのびる。198は体部外面に2条沈線を施す。199は注ぎ口と考える。200は口縁部が外反気味にのびる。201は貼付高台を有し底部中央から体部にかけやや斜めにのびる。高台部は薄く垂直気味で外側端部が膨らむ。202は高台部がやや外側にふんばる。203は高台部分が端部にかけて肉厚で、やや外側にふんばる。204は平坦な底部から、やや内湾気味に立ち上がる。205は底部で体部は垂直気味に立ち上がる。206～212は壺である。206の口縁部は外反気味にのび、口縁端部は薄く仕上げる。207は口縁部が外反気味にのび、体部にかけて「く」の字状を呈すると思われる。外面に自然軸がかかる。208は肉厚で、口縁端部は玉縁状。209はやや肉厚で口縁端部は外反気味にのびる。210は首付け根部分から口縁部にかけて外反気味にのびる。体部には波状文が施される。211は肉厚で平坦な底部からなり、体部はやや薄く垂直気味にのびる。高台はやや外側にふんばる。212は大径の壺底部か。213・214は高杯である。213は有蓋高杯の杯身で、肉厚な体部から成り口縁部はやや内面にのびる。214は脚部で3か所に透かし窓が入る。215は円面鏡である。脚部には葉文が施される。5か所又は6か所透かしが施される。6世紀後半～9世紀初頭のものと考える。

216は貼付高台を有する美濃産の椀である。内外面ともに軸がかかる。高台部はやや垂直気味に立つ。高台外側端部が接地する。10世紀前半のものと考える。

217は貼付高台を有する椀である。高台部は薄く、やや外側にふんばる。218は段皿である。全体に厚みがあり、体部から口縁部にかけ外反気味にのびる。219は皿である。貼付高台を有し、高台から底部にかけて露胎している。高台はやや垂直気味に立つ。220は貼付高台を有する壺で体部は肉厚。高台外側端部が接地する。9世紀中葉～末のものと考える。

221・222は丸底を呈すると思われる。口縁端部はやや尖る。8世紀後半～9世紀前半のものと考える。

223～225は椀である。223は体部が薄く口縁部にかけて厚くなる。口縁端部を摘まみ上げる。224・225は貼付高台を有し、224は底部から体部にかけて薄く仕上げ、高台はやや外側にふんばる。225は底を平坦に仕上げる。高台外側は屈曲し、やや外側にふんばる。

226～228は甕である。226は口縁端部中央にややへこみを持つ。体部から口縁部にかけて「く」の字状を呈すると思われる。227は口縁端部を内面上方に摘まみ上げる。228は体部から口縁部にかけて薄く仕上げ、口縁端部はやや垂直気味に尖る。9世紀後半～10世紀前半のものと考える。

229は壇である。8世紀か。

230は砥石で2面に使用痕が確認できる。

なお、包含層上層にて北宋錢と思われる銅錢が1枚出土したが、判読不能なため図示していない。

弥生土器包含層（第159～161図）

＜出土物＞弥生土器:231～251

231～240は甕である。231・232・236・237・238の口縁端部には刻みが施される。231の体部外面には5条、237の体部外面には6条沈線が施される。238の体部外面には2条1単位の沈線が4単位確認できる。236は体部が垂直気味に上がる。233・234・235は体部から口縁部にかけて外反気味にのび、口縁端部は僅かに丸みを帯びる。234は体部外面に煤が付着している。239は底部で肉厚な底を持つ。240は底部を摘まみ出して高台部を成形している。高台部はやや外側にふんばる。241は鉢体部と思われるが詳細は不明。242～250は壺である。242は体部に5条の貼付突帯が施される。243は体部から口縁部にかけてやや外反気味にのびる。頸部に8条沈線を施す。244・245は口縁端部を上方に摘まみ上げ、244は口縁端部に刻みが施される。246～250は底部で、249のみ底が薄く体部にかけて厚くなる。250は底部外側中央に凹みを持つ。251は壺体部と思われるが、正確な器種は不明。突帯に刻みが施される。弥生前期のものと考える。

なお、図示しなかったが櫛描き波状文を

持つ弥生中期と考えられる土器破片が出土しており2次的に堆積した包含層だと考えられる。



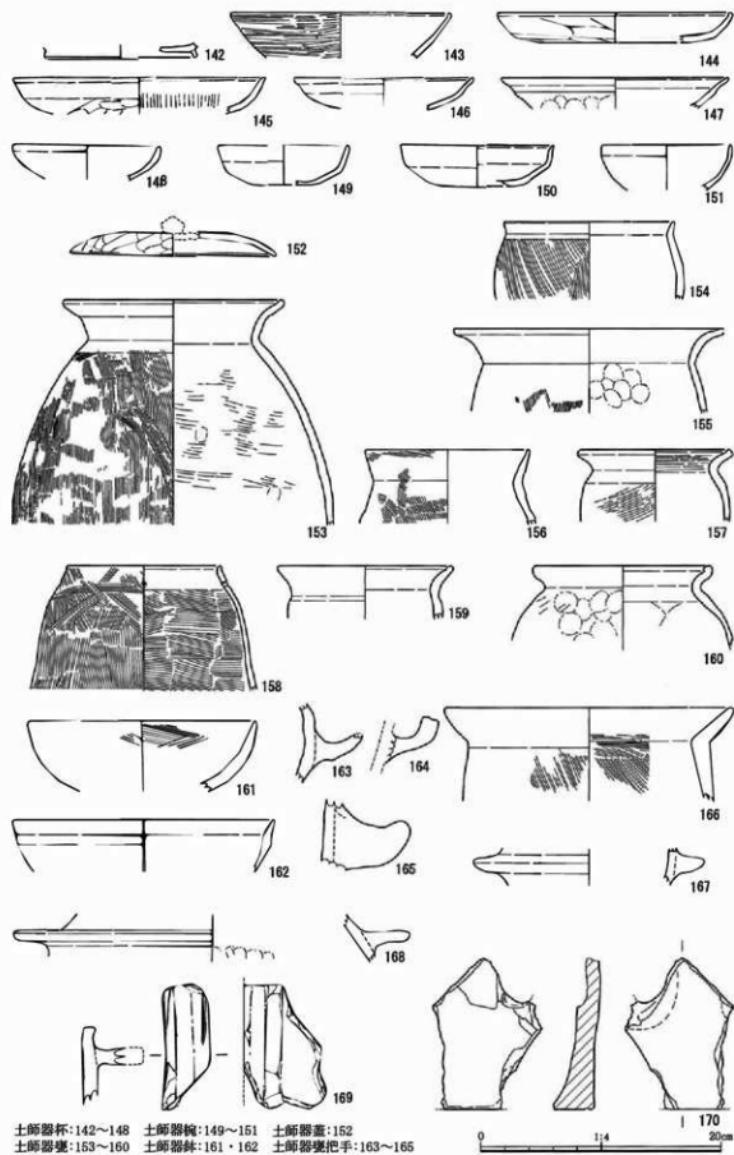
第150図 D 3 区弥生土器出土状況（西から）



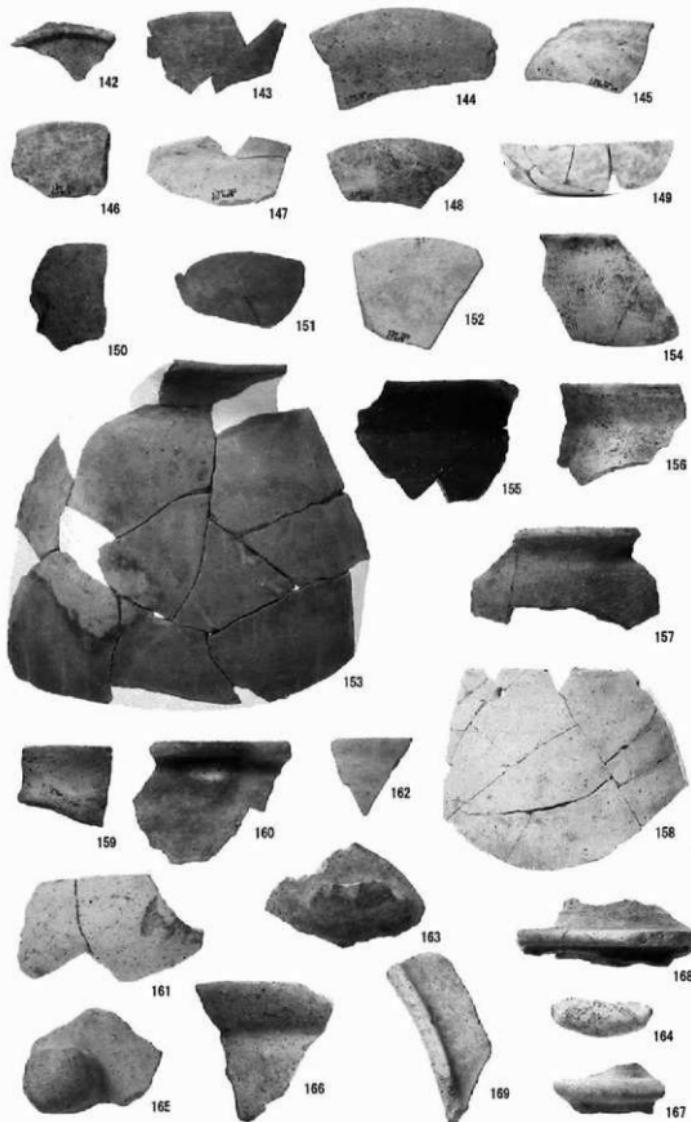
第151図 西区下層確認状況（西から）



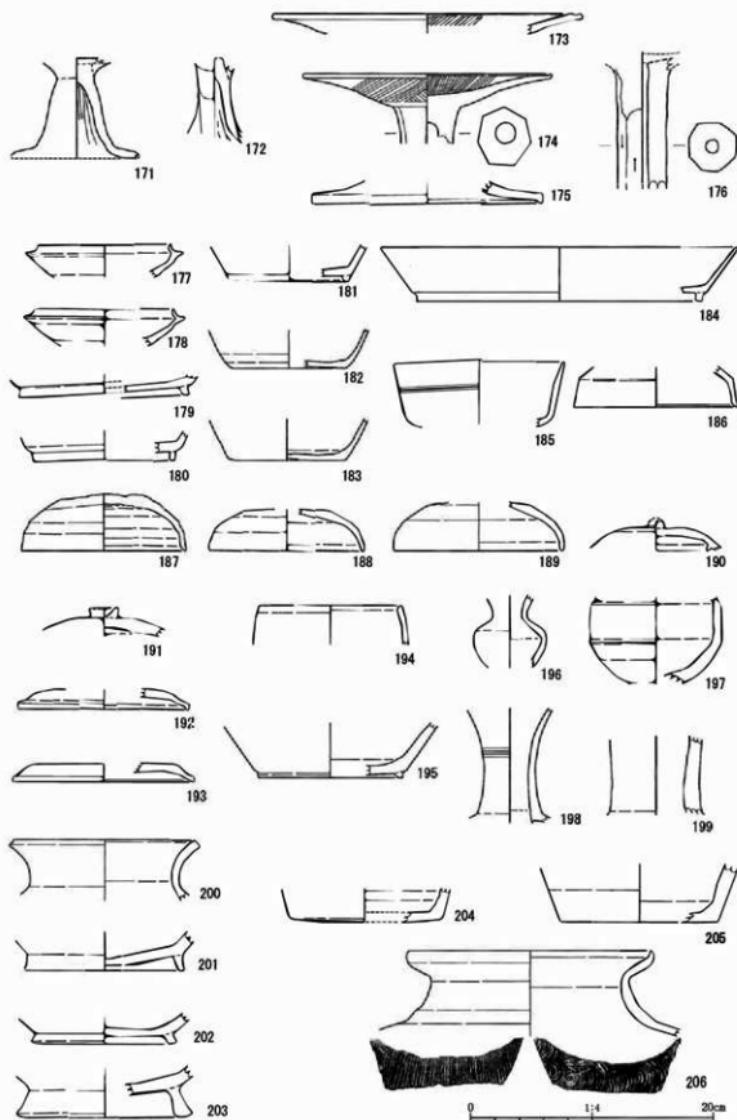
第152図 東区下層確認状況（西から）



第153図 包含層出土遺物実測図



第154圖 包含層出土遺物

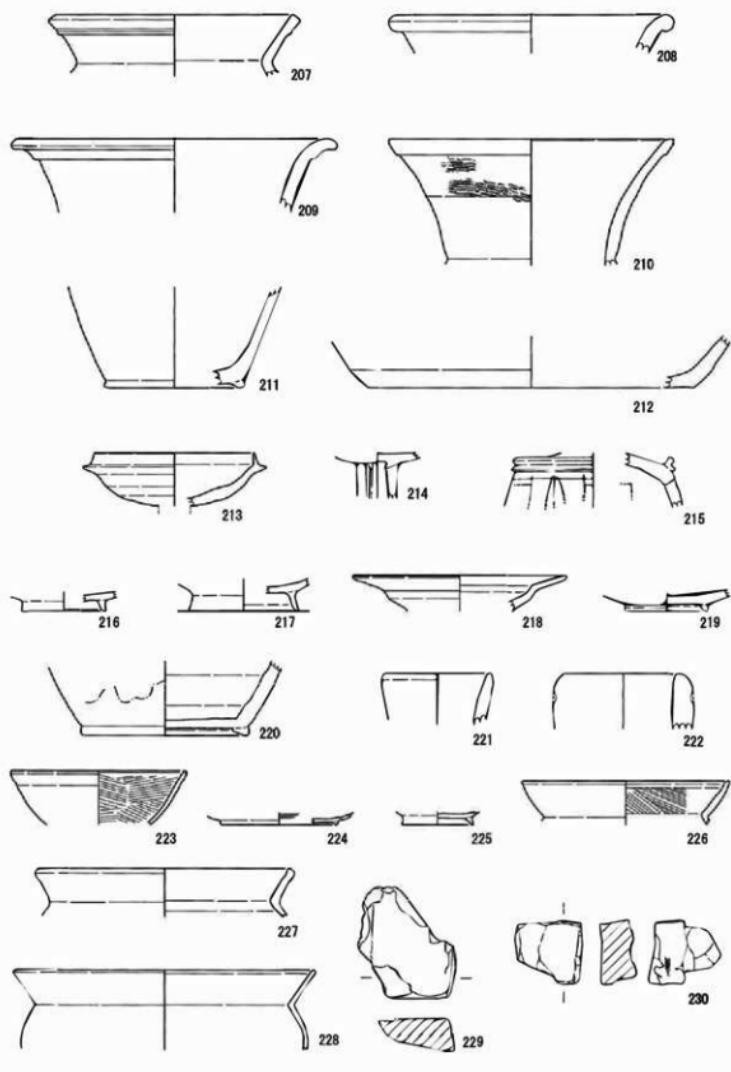


土師器高杯:171~176 須惠器器身:177·178 須惠器器杯:179~183 須惠器盤:184 須惠器碗:185
須惠器蓋:186~189 須惠器高杯蓋:190·191 須惠器碗B蓋:192·193 須惠器鉢:194·195
須惠器蓋:196~205 須惠器甕:206

第155圖 包含層出土遺物實測圖

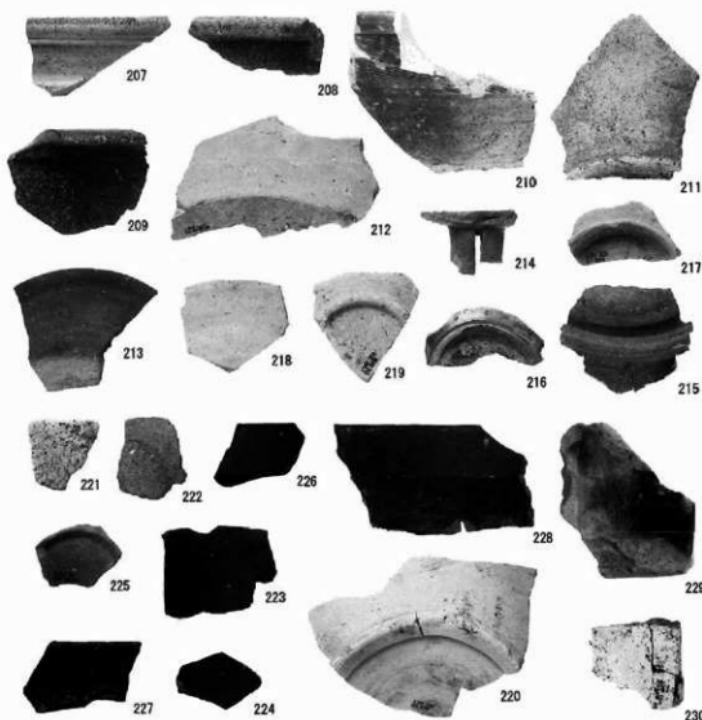


第156図 包含層出土遺物

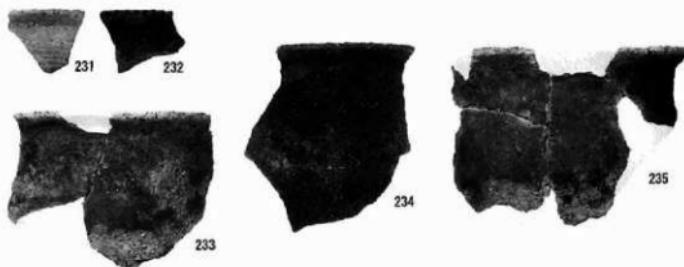


須惠器壺:207~212 須惠器高杯:213~214 須惠器円面鏡:215
綠釉陶器碗:216 灰釉陶器碗:217 灰釉陶器皿:218 灰釉陶器皿:219 灰釉陶器皿:220
塗瓦瓶:221~222 黑色土器碗:223~225 黑色土器壺:226~228
埴:229 研石:230

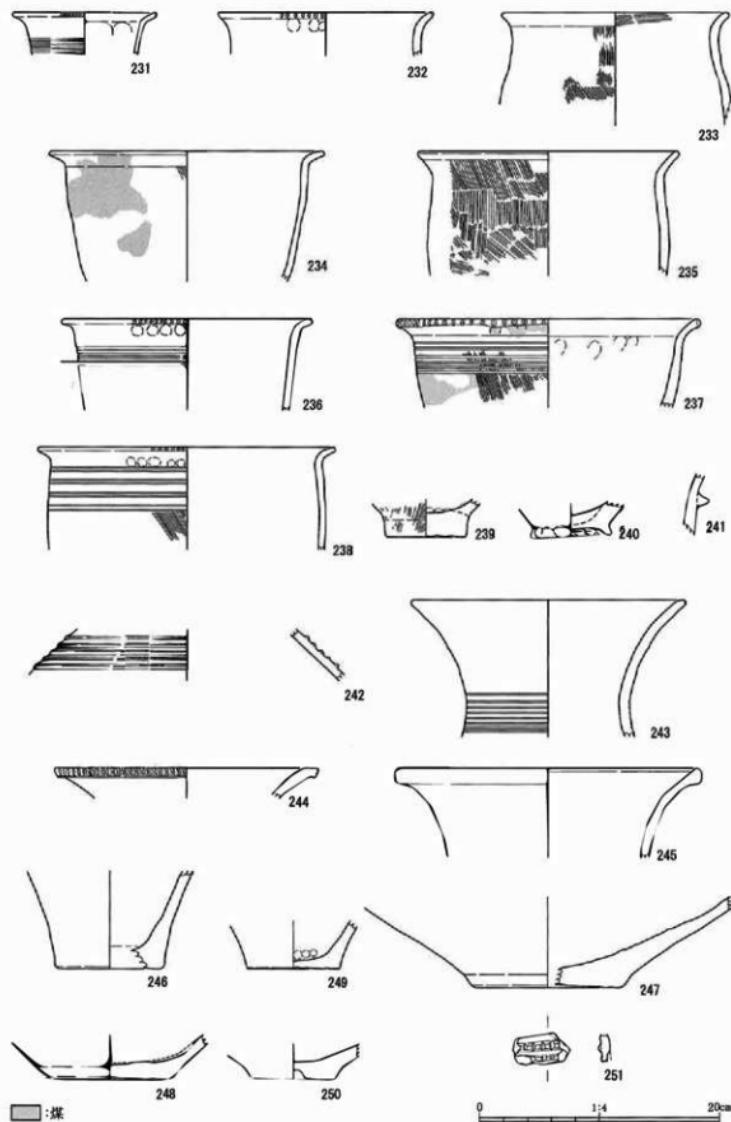
第157図 包含層出土遺物実測図



第158図 包含層出土遺物

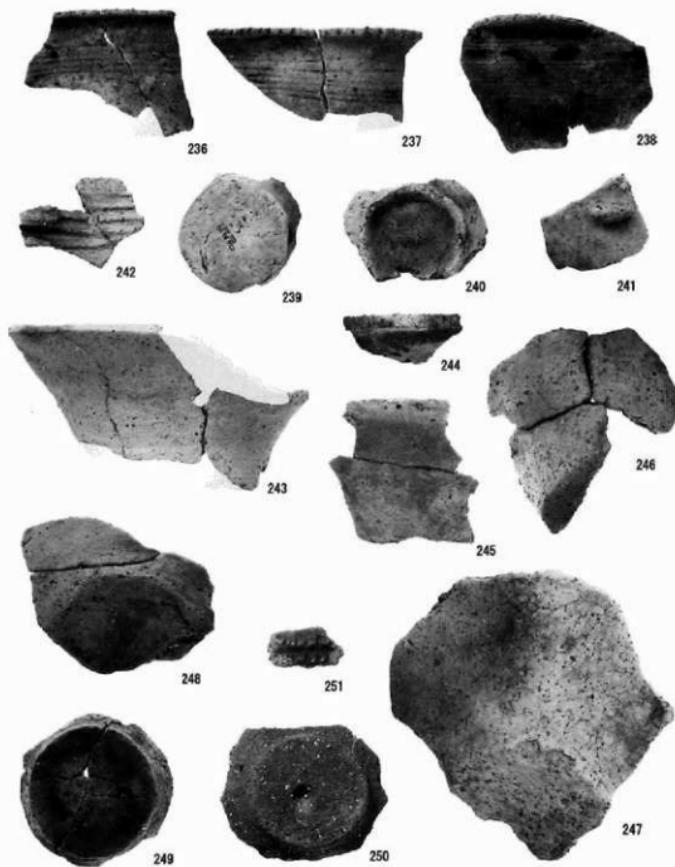


第159図 弥生土器包含層出土遺物



弥生土器甕:231~240 弥生土器鉢:241 弥生土器壺:242~250 弥生土器壺か:251

第160図 弥生土器包含層出土遺物実測図



第161図 弥生土器包含層出土遺物

建物番号	区	建物区分	間数	桁行長	梁行長	占有面積	方位	時期	出土遺物	備考
SB600	B・C-3・4	側柱	2間×1間	4.1m	2.4m	9.84m ²	N-5°-W	平安	土師器 須恵器	-
SB601	C・D-2・3・4	側柱	3間×2間	5.0m	3.8m	19.0m ²	N-25°-W	平安	土師器 須恵器 柱根	-
SB602	C・D-2・3・4	總柱	3間×2間	4.2m	3.7m	15.54m ²	N-30°-W	奈良	土師器 須恵器 黒色土器	-
SB603	C・D-2・3・4	總柱	2間×2間	4.3m	4.1m	17.63m ²	N-32°-W	奈良	土師器 須恵器	-
SB604	C・D-3・4	-	2間×2間以上	3.8m	(3.3m)	-	N-30°-W	奈良	土師器	-
SB605	E-4・5	側柱	2間×1間以上	3.3m	(1.7m)	-	N-28°-W	奈良～平安	土師器 柱根	-
SB606	D・E-3・4	側柱	3間以上×2間	(4.2m)	3.6m	-	N-33°-W	奈良	土師器 ミニチュア土器 須恵器	-
SB607	D・E-3・4	-	2間以上×1間	(3.6m)	2.7m	-	N-33°-W	奈良	土師器 須恵器	-
SB608	D・E-3・4	側柱	2間以上×2間	(3.5m)	3.5m	-	N-33°-W	奈良	土師器 須恵器	-
SB609	C・D-5・6・7	側柱	3間×2間	5.6m	4.2m	23.52m ²	正方位	平安	土師器 須恵器 灰釉陶器 製塙土器 黒色土器	南側に 底部有り
SB610	B・C-5・6・7	側柱	4間×2間	6.8m	3.3m	22.44m ²	N-32°-W	奈良	土師器 須恵器 黒色土器	-
SB611	B-3・4・5	-	3間×1間	5.6m	2.9m	16.24m ²	正方位	平安	土師器 須恵器 製塙土器 黒色土器	-
SB612	E-2	-	1間以上×1間以上	(2.0m)	(2.0m)	-	正方位	平安	土師器 須恵器	-
SB616	A-6・7・8	-	3間×1間以上	6.2m	-	-	正方位	平安	土師器 須恵器 黒色土器	-
SB617	C・D-6・7	-	3間以上×2間	(5.3m)	3.5m	-	正方位	平安	土師器 須恵器 黒色土器	-
SB618	A・B-8・9	側柱	2間以上×1間	(4.5m)	2.6m	-	N-32°-W	奈良	土師器 須恵器	-
SB619	D・E-5・6・7	側柱	3間×2間	6.8m	4.2m	28.56m ²	N-32°-W	奈良	土師器 須恵器 製塙土器 柱根	-
SB620	C・D-7・8	側柱	2間×2間	3.4m	3.1m	10.54m ²	N-30°-W	奈良	土師器 須恵器	-

付表2 振立柱建物一覧

柱列番号	区	間数	長さ	方位	時期	出土遺物	備考
SA613	D-2	2間以上	(南北) 3.0m以上	N-32°-W	平安	土師器	-
SA614	C・D-4	3間	(南北) 6.3m	N-23°-W	平安	土師器	-

付表3 柱列状構造一覧

遺物番号	造構	種別	器種	法量:cm		成形・調整		色調	時期	備考			
				() :復元長 □ :残存長		外面	内面						
				口径	底径								
1	耕作溝	土師器	杯	-	(13.4)	[1.6]	ナデ	ナデ	淡黄色	8C末～9C初頭			
2	耕作溝	土師器	杯	(17.4)	(6.0)	(4.3)	ヘラケズリ	ナデ	浅黄褐色	8C末～9C初頭			
3	耕作溝	土師器	皿	(17.6)	(13.6)	(1.6)	ヘラケズリ	ヨコナデ	褐色	9C第2四半期			
4	耕作溝	須恵器	杯身	(10.4)	-	[2.2]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	8C末～9C初頭			
5	耕作溝	須恵器	杯	-	(8.4)	[0.8]	ナデ	ロクロナデ	灰色	8C末～9C初頭			
6	耕作溝	須恵器	杯	-	(8.0)	[2.0]	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	8C末～9C初頭			
7	耕作溝	須恵器	鉢	(13.6)	-	[2.0]	回転ナデ	回転ナデ	灰色	9C末～10C初頭			
8	耕作溝	須恵器	壺	-	(7.6)	[2.6]	回転ナデ	ロクロナデ	灰色	7C後～8C初頭			
9	耕作溝	須恵器	杯G蓋	(10.8)	-	(3.0)	ロクロナデ	ナデ	灰白色	7C後			
10	SB600 SK17	土師器	杯	(19.8)	-	[1.7]	ヨコナデ	ナデ	橙色	8C後～9C初頭			
11	SB600 SK21	土師器	皿	-	-	[2.0]	ナデor ケズリ	ヨコナデ	橙色	8C後～9C初頭			
12	SB609 SK200	土師器	杯	(14.0)	-	[2.9]	ヨコナデ	ナデ	橙色	9C第2四半期			
13	SB609 SK209	土師器	杯	(15.2)	-	[2.4]	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	橙色	9C第2四半期			
14	SB609 SK37	土師器	杯	-	-	[0.9]	ケズリ	ナデ	黄灰色	9C第2四半期			
15	SB609 SK207	土師器	杯	(15.4)	-	[2.2]	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰白色	9C第2四半期			
16	SB609 SK37	土師器	杯	(15.8)	-	[3.4]	ヨコナデ ケズリ	ナデ	にぶい 黄褐色	9C第2四半期			
17	SB609 SK37	土師器	皿	(17.0)	-	[1.9]	ヨコナデ ケズリ	ナデ	橙色	9C第2四半期			
18	SB609 SK37	土師器	皿	(14.0)	-	[1.9]	ヨコナデ ケズリ	ナデ	橙色	9C第2四半期			
19	SB609 SK209	土師器	皿	(13.6)	(8.0)	(1.7)	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	にぶい 橙色	9C第2四半期			
20	SB609 SK207	土師器	甕	(27.8)	-	[3.3]	ヨコナデ	ナデ	にぶい 橙色	9C第2四半期			
21	SB609 SK223	土師器	甕	(23.8)	-	[3.0]	ヨコナデ ナデ	ハケ	灰白色	9C第2四半期			
22	SB609 SK207	須恵器	杯	(14.0)	(6.0)	(4.0)	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰白色	9世紀中葉			
23	SB609 SK209	須恵器	杯G蓋	(13.4)	-	[2.9]	ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	7C後			
24	SB609 SK207	黒色土器	杯	(16.8)	-	[4.0]	ヨコナデ ナデ	ミガキ	にぶい 黄褐色	9世紀中葉			
25	SB611 SK31	土師器	皿	-	-	[1.7]	不明	ヨコナデ	橙色	9C後～10C初頭			
26	SB611 SK22	黒色土器	椀	(16.0)	-	[4.3]	ミガキ ナデ	ヨコナデ ミガキ	にぶい 黄褐色	9C後～10C初頭			
27	SB612 SK47	土師器	皿	-	-	[1.7]	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	8C後～9C初頭			
28	SB612 SK113	土師器	甕	(14.8)	-	[1.6]	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色	8C後～9C初頭			
29	SB616 SK192	土師器	杯	(13.8)	-	[2.5]	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ	浅黄褐色	10C初頭			
30	SB616 SK192	七師器	杯	(14.0)	(5.0)	[2.8]	ナデ オサエ	ナデ	浅黄褐色	10C初頭			
31	SB616 SK192	土師器	甕	(15.0)	-	[4.3]	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	にぶい 黄褐色	10C初頭			
32	SB616 SK192	土師器	羽釜	(21.4)	-	[7.6]	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ オサエ	橙色	10C初頭			
33	SB616 SX164	須恵器	鉢	(20.0)	9.8	8.3	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	10C後半			
34	SB616 SX164	須恵器	平瓶	-	-	-	叩き	当て具痕	青灰色	10C初頭			
35	SB616 SX164	黒色土器	椀	16.0	7.7	6.2	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	浅黄色 黒色	10C			
36	SB617 SK198	土師器	杯	-	-	[2.3]	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ	橙色	9C後～10C初頭			
37	SB617 SK205	土師器	杯	(16.8)	-	[2.2]	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ	灰黄褐色	9C後～10C初頭			
38	SB617 SK205	土師器	杯	(14.5)	-	[3.0]	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ	浅黄褐色	9C後～10C初頭			

付表4 遺物観察表(1)

遺物番号	造構	種別	器種	法量:cm			成形・調整		色調	時期	備考
				() :復元長		□ :残存長					
				口径	底径	器高	外面	内面			
39	SB617 SK205	黒色土器	杯	(12.8)	-	[2.4]	ヨコナデ オサエ	ミガキ	明赤褐色	9C後半	-
40	SK07	土師器	杯	-	-	[1.7]	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	7C後～8C初頭	-
41	SK32	土師器	杯	(10.0)	-	[2.2]	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	7C後～8C初頭	-
42	SK32	土師器	甕	(13.0)	-	[3.4]	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰黄褐色	7C後～8C初頭	-
43	SK83	土師器	杯	(9.8)	-	[2.5]	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ	橙色	8C後～9C初頭	-
44	SD12	土師器	鉢	-	-	[2.2]	回転ナデ	回転ナデ ハケ	灰黄褐色	8C後～9C初頭	-
45	SD167	土師器	杯	(17.7)	-	[3.7]	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	橙色	8C後～9C初頭	-
46	SD167	土師器	皿	-	-	[1.6]	ヨコナデ ケズリ オサエ	ヨコナデ ナデ	にぶい 黄橙色	8C後～9C初頭	-
47	SD167	須恵器	高杯	-	(10.4)	[4.7]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	2か所に 透かし孔
48	SD167	須恵器	平瓶	(7.7)	-	[5.3]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	-
49	SB601 SK98	土師器	杯	(15.0)	-	[2.0]	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	7C後～8C前半	-
50	SB601 SK62	土師器	杯	(7.6)	-	[2.0]	ヨコナデ ナデ	ナデ	橙色	7C後～8C前半	-
51	SB601 SK115	土師器	杯	(13.6)	-	[2.2]	ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい 橙色	7C後～8C前半	-
52	SB601 SK64	土師器	皿	(22.2)	-	[3.3]	ヨコナデ ケズリ	ミガキ ハケ	灰白色	7C後～8C前半	-
53	SB601 SK62	土師器	甕	(19.4)	-	[4.4]	ヨコナデ ハケ	ハケ	灰白色	7C後～8C前半	-
54	SB601 SK64	土師器	甕	(20.0)	-	[6.6]	ヨコナデ ナデ ハケ	ナデ ハケ	淡黄橙色	7C後～8C前半	-
55	SB601 SK123	土師器	甕	(26.2)	-	[3.2]	ヨコナデ ナデ ハケ	ナデ	灰白色	7C後～8C前半	-
56	SB601 SK98	土師器	要把手	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白色	7C後～8C前半	-
57	SB601 SK64	土師器	要把手	-	-	-	ナデ	ナデ	淡黄橙	7C後～8C前半	-
58	SB601 SK98	土師器	羽釜	器径 (29.0)	-	[3.9]	ナデ ハケ	ナデ ハケ	灰白色	8C前半	-
59	SB601 SK98	土師器	高杯	-	(11.6)	[1.5]	ナデ	ヨコナデ ナデ	灰白色	7C後半	-
60	SB601 SK86	土師器	高杯	-	-	[3.6]	ナデ ケズリ	-	淡黄橙色	7C後半	-
61	SB601 SK62	須恵器	杯身	(10.0)	(6.0)	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	7C後～8C前半	-
62	SB601 SK95	須恵器	杯	(7.4)	(5.4)	(2.5)	回転ナデ ケズリ ナデ	回転ナデ	灰色	7C後～8C前半	-
63	SB601 SK95	須恵器	鉢	(10.2)	-	[2.5]	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	7C後～8C前半	-
64	SB601 SK64	須恵器	杯蓋	9.8	-	3.5	回転ナデ ケズリ	回転ナデ ナデ	灰色	7C後～8C前半	-
65	SB601 SK98	須恵器	杯B蓋	(15.4)	-	(0.8)	ナデ	回転ナデ	灰白色	8C後～9C初頭	-
66	SB601 SK150	木製品	柱根	残存長:[71.6cm] 底径[13.2cm×9.8cm]			-	-	-	-	-
67	SB601 SK62	木製品	柱根	残存長:[43.0cm] 底径[13.0cm×9.4cm]			-	-	-	-	-
68	SB601 SK64	木製品	柱根	残存長:[39.0cm] 底径[8.7cm×11.6cm]			-	-	-	-	-
69	SB601 SK121	木製品	柱根	残存長:[34.9cm] 底径[15.9cm×10.5cm]			-	-	-	-	-
70	SB601 SK122	木製品	柱根	残存長:[44.5cm] 底径[11.0cm×12.7cm]			-	-	-	-	-
71	SB601 SK98	木製品	柱根	残存長:[49.0cm] 底径[12.2cm×11.0cm]			-	-	-	-	-
72	SB601 SK123	木製品	柱根	残存長:[63.2cm] 底径[12.6cm×12.0cm]			-	-	-	-	-
73	SB602 SK85	土師器	杯	-	-	[3.1]	ナデ オサエ	ケズリ	橙色	7C後半	-

付表4 遺物観察表(2)

遺物番号	遺構	種別	器種	法量:cm			成形・調整		色調	時期	備考			
				() :復元長 □ :残存長										
				口径	底径	體高	外面	内面						
74	SB602 SK107	土師器	鉢	(16.6)	-	[2.4]	ヨコナデケズリ	摩減	明赤褐色	7C後~8C前半	-			
75	SB602 SK129	土師器	鉢	(17.4)	-	[3.9]	ナデ	ナデ	灰白色	7C後~8C前半	-			
76	SB602 SK85	土師器	甕	(22.3)	-	[3.1]	ナデ	ハケ	橙色	7C後~8C前半	-			
77	SB602 SK85	土師器	甕把手	-	-	-	ナデ	ナデ	黄褐色	7C後~8C前半	-			
78	SB602 SK61	須恵器	杯身	(11.4)	-	[3.7]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	-			
79	SB602 SK61	須恵器	杯身	(12.0)	(4.0)	[4.1]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	-			
80	SB602 SK108	須恵器	杯蓋	(14.8)	-	[2.7]	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	-			
81	SB603 SK106	土師器	鉢	(11.8)	-	[2.0]	-	-	明褐色	7C後~8C前半	-			
82	SB603 SK128	土師器	鉢	(13.4)	-	[7.4]	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙色	7C後~8C前半	-			
83	SB603 SK128	土師器	甕	(22.4)	-	[9.0]	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	灰白色	7C後~8C前半	-			
84	SB603 SK111	土師器	コシキ	(21.0)	-	[6.4]	ナデ オサエ	ナデ	にぶい 黄橙色	7C後~8C前半	-			
85	SB603 SK111	須恵器	杯身	-	-	[2.7]	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ	灰色	7C後半	-			
86	SB605 SK75	土師器	杯	-	-	(1.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐色	7C後~8C前半	-			
87	SK605 SK75	木製品	柱根	残存長:[36.8cm] 底径[14.2cm×8.6cm]			-	-	-	-	-			
88	SB605 SK163	木製品	柱根	残存長:[24.4cm] 底径[9.4cm×10.6cm]			-	-	-	-	-			
89	SB605 SK152	木製品	柱根	残存長:[23.8cm] 底径[7.7cm×5.6cm]			-	-	-	-	-			
90	SB606 SK77	土師器	甕	(8.4)	-	[1.5]	ナデ	ナデ	明赤褐色	7C後~8C前半	小甕			
91	SB606 SK93	土師器	甕把手	-	-	-	ナデ	ナデ オサエ	灰白色	7C後~8C前半	-			
92	SB606 SK80	須恵器	杯身	(11.0)	(6.0)	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	7C後半	-			
93	SB606 SK80	須恵器	高杯	-	(12.8)	[2.9]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	7C後半	-			
94	SB606 SK77	須恵器	高杯	-	-	[3.1]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	7C後半	3か所に 透かし孔			
95	SB607 SK94	土師器	鉢	(16.0)	-	[3.5]	ヨコナデ ナゲ	ナデ	にぶい 橙色	7C後~8C前半	-			
96	SB607 SK94	土師器	鉢	(16.0)	-	[4.1]	ヨコナデ ナゲ ケズリ	ナデ	にぶい 黄橙色	7C後~8C前半	-			
97	SB607 SK94	須恵器	杯身	(10.6)	(6.0)	[2.3]	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰色	7C後半	-			
98	SB608 SK153	土師器	鉢	(11.8)	-	[3.5]	ヨコナデ ナゲ	ナデ	橙色	7C後~8C初頭	-			
99	SB608 SK153	須恵器	高杯	-	(9.4)	[2.7]	回転ナデ	回転ナデ	灰色	7C後~8C初頭	-			
100	SB610 SK189	土師器	杯	(13.0)	-	[2.0]	ヨコナデ ナゲ	ヨコナデ	橙色	7C後~8C前半	-			
101	SB610 SK190	土師器	杯	-	-	[2.0]	ナデ	ヨコナデ	橙色	7C後~8C前半	-			
102	SB610 SK189	土師器	鏡	(40.0)	-	[2.2]	ヨコナデ ハケ	ハケ	淡黄色	7C後~8C前半	-			
103	SB610 SK189	須恵器	杯	11.0	7.1	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ ナゲ	灰色	7C後~8C前半	-			
104	SB610 SK190	須恵器	杯G蓋	-	(10.0)	[1.7]	ロクロケズリ	ロクロケズリ	灰色	7C後半	-			
105	SA613 SK131	土師器	杯	(12.8)	-	[2.4]	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	8C後~9C初頭	-			
106	SA613 SK112	土師器	椀	(11.8)	-	[2.6]	ケズリ	ナデ	にぶい 橙色	8C後~9C初頭	-			

付表4 遺物観察表(3)

5. まとめ

今回の発掘調査では、平安～中世にかけての耕作溝、奈良～平安時代の集落跡、飛鳥時代の井戸、下層に弥生前期を中心とする遺物包含層を確認し、三山木遺跡に関する新たな知見を得ることができた。以下、成果を記しまとめとしたい。なお、本章では既調査地を1～5次調査（区）、今回の調査を6次調査（区）と称して説明する。

（1）弥生時代

1次調査以前に京田辺市教育委員会が行った試掘調査によって、三山木遺跡は弥生時代前期末頃に成立していたことがわかり、2次調査でさらに古い前期中頃に成立したことが確認され、三山木遺跡は南山城地城で最も早い段階に成立した弥生集落であると考えられている。6次調査でも古代遺構面下層確認時に検出した弥生土器包含層からは、前期後半に該当する壺・甕・鉢などを中心に極少量の中期の土器が出土した。

6次調査区より南西約40m地点で行われた1次調査では、明確な弥生集落跡は確認されていないが前期の土器棺墓とみられる壺、中期の墓・溝・土坑などが確認されている。特に溝からは大量の土器・石器が廃棄された状態で出土しており、これらの遺構は集団の居住域が近隣に存在していたことを示している。また、2次調査（トレンチ2）では6次調査と同様に弥生土器を含む包含層を確認している。出土遺物は前期末の多条沈線文が中期初頭の櫛描き文へと移行・定着する時期を示していた。6次調査区から北西へ約40m地点で行われた5次調査（トレンチ1）は尾根丘陵先端部にあたる。包含層からは前期後半から中期前半の遺物が出土しているが、多時期にわたって削平の影響を受けており、明確な集落跡検出には至っていない。

6次調査では弥生土器包含層を調査区全域で確認し、ことに西側ほど多い土器の量であったが、既調査地同様明確な居住域を示す遺構の検出には至っていない。5次調査区から南側は地形が大きく傾斜しており、6次調査区は丘陵裾部にあたる。確認した弥生土器包含層は、周辺から流れ込んだ遺物が沼地状の場所に堆積したものであり、6次調査区から台地状に傾斜が上がる北西周辺に弥生時代の居住域が存在していたと想定できる。

なお、古墳時代ごとに前期・中期について遺物もなく空白地帯であった様子である。

（2）飛鳥、奈良・平安、平安時代以降

＜飛鳥時代＞

SE196（6次調査）からは7世紀中葉～8世紀初頭の遺物が出土している。機能期間は8世紀初頭以前と想定でき、6次調査で検出した遺構の中で、出土遺物から明確に時期を掴めるものとして最も古い遺構と考えられ、官道である山陽道の整備に伴い機能が停止した可能性も考えてよいかもしれない。また、多くの柱掘方や土坑・包含層からも飛鳥時代

の土器が多数出土していることから、調査地周辺おそらく北西側の高い部分に同時期の遺構が展開していたものとみられる。2次調査（トレンチ5）では、SE196と同様の素掘りの井戸跡が確認されているが、井戸内からの出土遺物が無く時期は不明と報告されている。SE196と同様の機能期間を示す遺構を確認できていないため正確な様相を掴むのは困難だが、調査区及びその周辺では、弥生時代前期から中期にかけて展開された集落域と飛鳥時代のそれが重なるものと考えられる。

＜奈良・平安時代＞

4章の（2）で述べたとおり2面目では主軸方位がほぼ正方位の建物跡、3面目では主軸方位が大きく西に振れる建物跡を確認した。既調査地では、1次調査では確認されず2次から5次調査までに主軸方位が正方位の建物跡を5棟、大きく西に振れる建物跡を3棟確認している（第162図参照）。6次調査区で確認された建物跡の密度は1～5次調査では見られなかったものである。

6次調査で検出した建物年代観は、出土遺物から、3面目検出建物跡はSB602～608・610・618・619・620が8世紀前半、SB601が9世紀前半に成立したと考えられる。2面目検出建物跡はSB600・609・612が9世紀中頃、SB611・616・617が大きくみて10世紀中頃と考えられる。SB604からの出土遺物はないが、周辺の状況から8世紀前半とみてよいだろう。SB601～604・SB605～608に見られる同一箇所での3回にも及ぶ建替え行為は8世紀前半～9世紀前半にかけて建築箇所を制限される厳しい規制があり、SB601が建築されるまで区割りが守られていたとみられ、現在の府道八幡木津線が古代の山陽道をほぼ踏襲していると考えられていることから、山陽道に沿った区画があったことが考えられる。また、柱列SA613は、出土遺物からはSB601と同時期の柱列であるが、この柱列SA613の方向からはSB601よりもSB602あるいはSB603との組み合わせも考えられ、SB601は方向からはSA614との組み合わせも考えられ、組み合わせは確定できない。9世紀中頃から10世紀に入る中で、建物の主軸方位に大きな変化が見られる点は、奈良時代から踏襲し続けていた建築規制を平安時代に大きく見直す土地改変があったことを示している。

＜平安時代以降＞

2面目では建物跡以外に古代耕作溝を、1面目では中世耕作溝を検出している。2次調査（トレンチ4・5）でも、時期は不明であるが同様の規格性を持った溝跡を確認している。1面目では他に土坑状の遺構を1基確認したが建物跡は確認できなかった。SB616を構成するSX164の須恵器鉢・黒色土器椀は10世紀後半の建物廃絶時あるいはその直後の祭祀に關したものとみられ、これを最後にそれまであった居住域は移動したものと理解される。

その後、6次調査地及びその周辺は耕作地として利用され始め、平成の土地区画整理事業が実施される現代まで続いたものと考えられる。

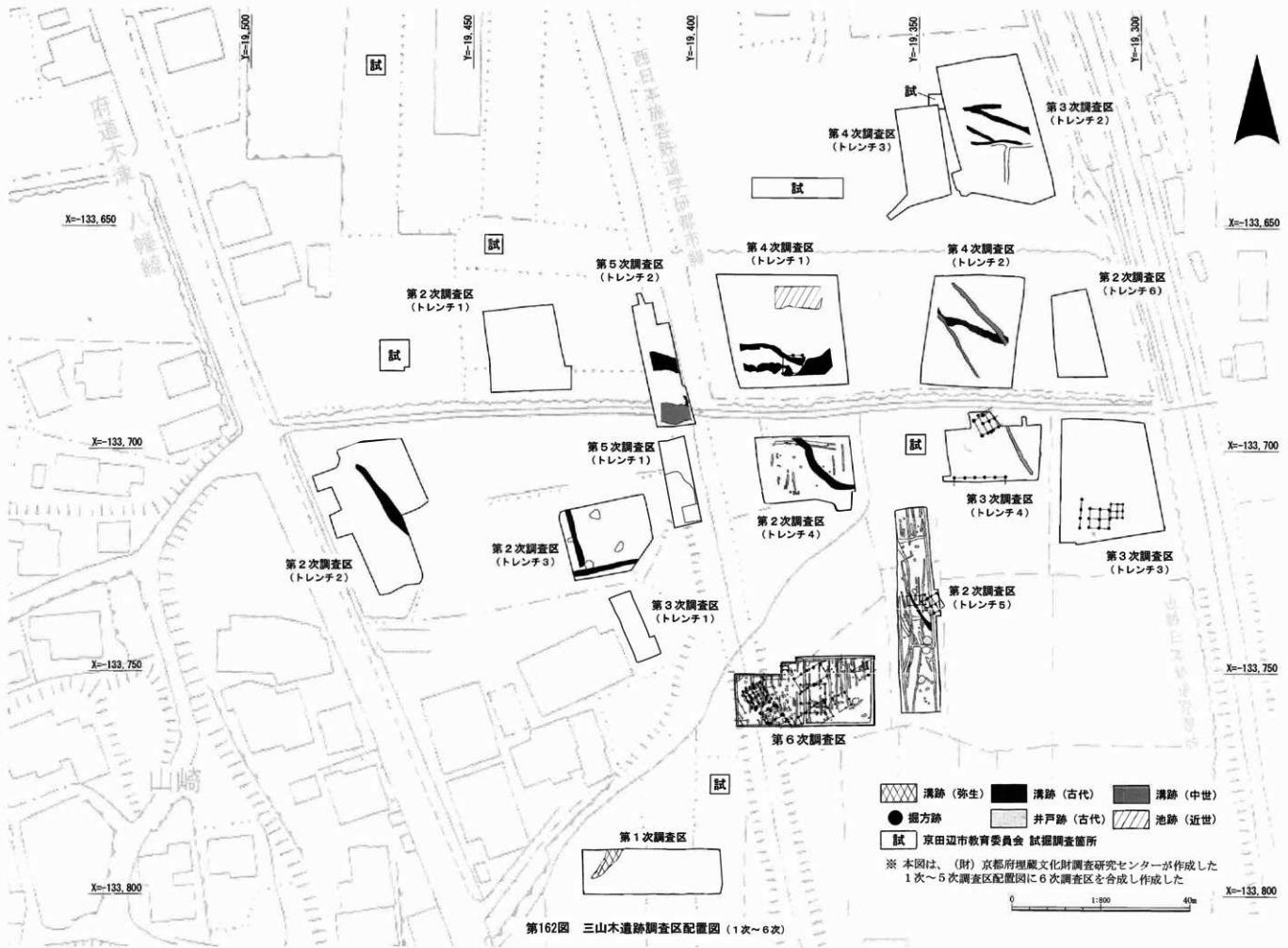
(3) 6次調査成果から見る「山本駅」の所在

6次調査3面で確認した建物跡・柱列は、主軸方位がN30°～N33°Wを測るものが多く、これは前述のとおり古代山陽道に沿って配列されたものと考えられ、厳しい建築規制が認められることからも、建物の配列は綿密な区画整備に基づいて行われたことが窺われる。『続日本紀』和銅4年(711)の条に山本駅設置の記載があり、今回の調査で駅に関係した遺構・遺物が確認されることが期待された。駅の設置時期とSB602～604・605～608等の成立時期とが近いことから、各建物群を山本駅と関連付けたいが、建物の規格・規模などを踏まえると検出した建物跡は一般的な建物の規格性であり、重要施設とは捉え難い。包含層(上層)から瓦片が出土したが(細片のため図示していない)、瓦葺建物を想定するほどの量ではない。また、製塩土器が遺構・包含層を問わず多数出土しており、製塩作業が集落の中で行われていたと想像される。確認された建物跡は集落の生活に必要な倉庫等の役割を担っていたと考えたい。また、墨書き土器を含む文字資料など明確に山本駅の所在を示す遺物や計画的な配置の建物跡などが確認できていないことからも、6次調査で検出した建物跡は山本駅とは直接結びつかないと現状では考えられる。

6次調査では、三山木遺跡成立時期と考えられる弥生前期から、飛鳥・奈良・平安各時代の様相を掴むうえでの遺構・遺物を確認することができた。ことに過去の調査ではあまりみられなかった古代の建物跡の密集度は注目すべきことであろう。要因として、調査地が丘陵裾部にあたり、削平の影響を受けにくかったことが挙げられるだろう。しかし、弥生時代に関しては、前期に三山木遺跡が成立したことを再確認したとはいえ、既調査同様明確な居住範囲を確認するに至っていない。また、今回検出した奈良から平安時代の建物跡を倉庫等と捉えた以上、それに伴う居住域の存在も想定される。今後、さらなる調査及び既調査成果と合わせた資料のとりまとめが進み、山本駅の所在も含め、三山木遺跡の様相がより明確化することを期待したい。

参考文献

- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000 『京都府遺跡調査概報』第92冊
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001 『京都府遺跡調査概報』第98冊
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002 『京都府遺跡調査概報』第103冊
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 『京都府遺跡調査概報』第106冊
- 京田辺市教育委員会 1999 『二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報』
- 京田辺市教育委員会 2010 『南山遺跡発掘調査報告書』
- 京田辺市教育委員会 2011 『興戸遺跡第16次発掘調査報告書』



報告書抄録

平成26年6月30日 印刷
平成26年6月30日 発行

三山木遺跡第6次発掘調査報告書

—集合住宅建設に伴う発掘調査—

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第41集)

発行 京田辺市教育委員会
〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地
電話 0774-62-9550

編集 株式会社イビソク 関西支店
〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地
電話 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社